

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 8

1998. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 8

1998. 3

徳島市教育委員会

序 文

市内を東西に貫く大河・吉野川と眉山の豊かな緑に象徴されるまち・徳島市には、悠久の歴史を証す文化遺産が数多く遺存しております。

都市開発事業の波はこれらの文化遺産にも大きな影響を与えていますが、発掘調査により明らかにされる数々の埋蔵文化財からは、かつて徳島の地に生活した先達の心を読み取ることができます。これらを学び受け継ぐことは、歴史・文化・自然を生かした創造性の高いまちづくりに通ずるものと思われます。

本市では、開発と文化財保護の両者を円滑に調和すべく発掘調査を実施しており、多大な成果を得ています。

本書は発掘調査の成果を一冊の報告書としてまとめたものですが、生涯学習および歴史教育、さらには学術研究の場に微力なりとも寄与することができれば、幸甚かと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大な御理解と御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成10年3月31日

徳島市教育委員会
教育長 小林 實

例 言

- 1 本書は平成2～7年度に徳島市内の埋蔵文化財包蔵地における諸開発事業に伴い実施した緊急発掘調査等の内、4遺跡4件についての概要報告書である。
- 2 報告の対象となった遺跡名、調査場所、調査期間、調査地については抄録に記載した。
- 3 発掘調査は徳島市教育委員会が主体となり、本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。
- 4 出土遺物、図面、写真の整理等報告書作成に関する作業において、下記の方々の御協力を得た。記して感謝したい。

佐伯俊裕 高木 淳 市川欣也 倉佐晃次 中野勝美 山口文子 折野絵美
山本宗昭 青木健司 藤村友彦 吉田祐子 露口啓子

- 5 本書に収録した遺物および記録類は、すべて徳島市教育委員会社会教育課において収蔵・保管する。
- 6 本書の作成には調査担当者が分担して執筆し、目次にその文責を明らかにした。なお編集は勝浦康守が行った。



調査位置図（国土地理院発行1/50,000「徳島」「川島」縮尺使用）

1名東遺跡 2（仮称）松熊神社集石状遺構 3矢野遺跡・阿波国府跡 4阿波国府跡

目 次

序文

例言

目次

本文目次

- I 名東遺跡（住宅開発工事）……………（勝浦康守）…………（1）
- II （仮称）松熊神社集石状遺構（阿波史跡公園整備工事）……………（三宅良明）…………（25）
- III 矢野遺跡・阿波国府跡（市道拡幅工事）……………（勝浦）…………（31）
- IV 阿波国府跡（水道管理設工事立会）……………（勝浦）…………（41）

挿図図版

写真図版

挿図図版

I 名東遺跡（住宅開発工事）

- 第1図 調査地位位置図
第2図 調査地I・II区遺構配置図
第3図 土器棺墓SI01
第4図 名東19号墓南周溝（1~4）、土器棺墓SI01（5,6）出土遺物
第5図 名東22号墓東周溝（7~11）、名東21号墓東周溝（12,13）出土遺物
第6図 名東19号~22号墓
第7図 土器棺墓SI02
第8図 名東23号墓周溝上層（14~28）出土遺物
第9図 名東23号墓周溝上層（29~44）出土遺物
第10図 名東23号墓
第11図 名東23号墓周溝下層（45~54）出土遺物
第12図 竪穴住居跡SA01
第13図 竪穴住居跡SA01（52~62）出土遺物
第14図 竪穴住居跡SA01（63~77）出土遺物
第15図 竪穴住居跡SA01（78~91）出土遺物

II（仮称）松熊神社集石状遺構

（阿波史跡公園整備工事）

- 第1図 周辺の主な古墳位置図
第2図 トレンチ配置概略図
第3図 集石状遺構と壘形埴輪（2）出土状況平面図・断面図
第4図 集石状遺構出土壘形埴輪

III 矢野遺跡・阿波国府跡（市道拡幅工事）

- 第1図 調査地位位置図
第2図 遺構配置図
第3図 竪穴住居跡SA01SP01（3）、SA

02（1）、SA02SP01（2）、SA03（4,5）、溝SD01（6,7）、SD02（8~10）、SP01（建物跡SH01,13~16）、建物跡SH04SP01（11,12）

- 第4図 調査地周辺地形図

IV 阿波国府跡（水道管理設工事立会）

- 第1図 遺物出土位置図
第2図 出土遺物

写真図版

名東遺跡（住宅開発工事）

- 図版1 上：調査地I区全景
下：方形周溝墓群検出状況
図版2 上：名東19号墓検出状況
下：名東19号墓南周溝遺物検出状況
図版3 上：土器棺墓SI01検出状況
下：土器棺墓SI01検出状況
図版4 上：土器棺墓SI01切り取り作業
下：土器棺墓SI01切り取り作業
図版5 上：土器棺墓SI01切り取り作業
下：土器棺墓SI01切り取り作業
図版6 上：名東21号墓上層遺物検出状況
下：名東21号墓東周溝上層遺物検出状況
図版7 上：名東21号墓検出状況
下：名東21号墓東周溝検出状況
図版8 上：名東22号墓東周溝遺物検出状況
下：名東22号墓東周溝遺物検出状況
図版9 上：名東22号墓東周溝遺物検出状況
下：名東22号墓東周溝遺物検出状況
図版10 上：名東23号墓検出状況
下：名東23号墓西周溝堆積状況
図版11 上：名東23号墓南周溝遺物検出状況
下：名東23号墓南周溝内土器棺墓SI02検出状況
図版12 上：竪穴住居跡SA01検出状況
下：竪穴住居跡SA01遺物検出状況

- 図版13 上：竪穴住居跡SA01遺物検出状況
下：竪穴住居跡SA01遺物検出状況
- 図版14 上：竪穴住居跡SA01炉跡部遺物検出状況
下：竪穴住居跡SA01炉跡部遺物検出状況
- 図版15 名東19号墓南周溝出土遺物
- 図版16 土器棺墓SI01出土遺物
- 図版17 名東19号墓南周溝(3),名東21号墓東周溝下層(13)出土遺物
- 図版18 名東19号墓南周溝(2),名東21号墓東周溝下層(12),名東22号墓東周溝(10)出土遺物
- 図版19 名東22号墓東周溝出土遺物
- 図版20 名東23号墓上層出土遺物
- 図版21 名東23号墓周溝上層出土遺物
- 図版22 名東23号墓周溝上層出土遺物
- 図版23 名東23号墓周溝上層出土遺物
- 図版24 名東23号墓周溝上層出土遺物
- 図版25 名東23号墓周溝土層(40~43),土器棺墓SI02(44)出土遺物
- 図版26 名東23号墓周溝下層出土遺物
- 図版27 名東23号墓周溝下層出土遺物
- 図版28 竪穴住居跡SA01出土遺物
- 図版29 竪穴住居跡SA01出土遺物
- 図版30 竪穴住居跡SA01出土遺物
- 図版31 竪穴住居跡SA01出土遺物
- 図版32 竪穴住居跡SA01出土遺物
- 図版33 竪穴住居跡SA01出土遺物

II (仮称) 松熊神社集石状遺構

(阿波史跡公園整備工事)

- 図版1 上：調査地近景
下：同上
- 図版2 上：集石状遺構検出状況
下：同上
- 図版3 上：壺形埴輪(1)出土状況
下：同上
- 図版4 上：壺形埴輪(2)出土状況

下：同上

- 図版5 上：壺形埴輪(2)出土状況
下左：壺形埴輪(1)
下右：壺形埴輪(2)

III 矢野遺跡・阿波国府跡(市道拡幅工事)

- 図版1 上：調査地I区1-a遺構検出状況
下：調査地I区1-b遺構検出状況
- 図版2 上：調査地I区1-c遺構検出状況
下：調査地I区1-d掘立柱建物跡SH04検出状況
- 図版3 上：掘立柱建物跡SH04 SP01遺物検出状況
下：掘立柱建物跡SH04 SP01遺物検出状況
- 図版4 上：調査地I区1-e遺構検出状況
下：調査地I区1-e掘立柱建物跡SH05検出状況
- 図版5 上：調査地I区1-f掘立柱建物跡SH04検出状況
下：調査地II区2-b掘立柱建物跡SH07検出状況
- 図版6 上：調査地II区2-c竪穴住居跡SA02検出状況
下：調査地II区2-c竪穴住居跡SA03検出状況
- 図版7 竪穴住居跡SA02(1),SA02SP01(2),SA03(4,5),溝SD01(6,7)出土遺物
- 図版8 溝SD02(8,9),SP01(建物跡SH01,13~16),建物跡SH04SP01(11,12)出土遺物

IV 阿波国府跡(水道管埋設工事立会)

- 図版1 出土遺物
図版2 出土遺物

報告書抄録

| ふりがな | とくしましまいぞうぶんかざいほくつちょうさぎかいよう | | | | | | | |
|-----------------------|--|-------------|-------------------------------------|------------------|---------------------|-----------------------|---------------|-----------------------------|
| 書名 | 徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | 8 | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 三宅良明・勝浦康守 | | | | | | | |
| 編集機関 | 徳島市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 In. 0886-21-5418 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1998年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 緯度 | 東経 経度 | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 | |
| 東名 | 徳島県徳島市 東町 | 36201 | - | 34度 3分 40秒 | 134度 30分 18秒 | 19950717~ 19951031 | 1,000 | 共同住宅 地分譲 に伴う事前 調査 |
| (仮称) 松熊神社 集石状遺構 | 徳島県徳島市 国府町 | 36201 | - | 34度 3分 14秒 | 134度 28分 13秒 | 19900801~ 19900907 | 65 | 史跡公園 整備工事 に伴う事前 調査 |
| 矢野 阿波国府跡 | 徳島県徳島市 国府町 | 36201 | | 34度 3分 34秒 | 134度 28分 25秒 | 19961107~ 19970228 | 250 | 市道拡幅 工事に伴う 事前調査 |
| 阿波国府跡 | 徳島県徳島市 国府町 | 36201 | | 34度 3分 54秒 | 134度 28分 33秒 | 19941020~ 19950220 | 立会対象 5,000 | 水道管理設 工事に伴う 立会調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 東名 | 集落跡 | 弥生~古墳 中世 | 竪穴住居跡 方形周溝墓 土壇 溝 掘立柱建物跡 | | 弥生土器・土師器 | | | |
| (仮称) 松熊神社 集石状遺構 | 古墳? | 古墳 | 集石状遺構 | | 壺形埴輪 | | | |
| 矢野 阿波国府跡 | 集落跡 官衙跡 | 弥生~古墳 奈良 | 竪穴住居跡 土壇・溝 掘立柱建物跡 | | 弥生土器・土師器 須恵器・土師器 | | | |
| 阿波国府跡 | 官衙跡 集落跡 | 古代~中世 | | | 土師器・黒色土器 須恵器 | | | |

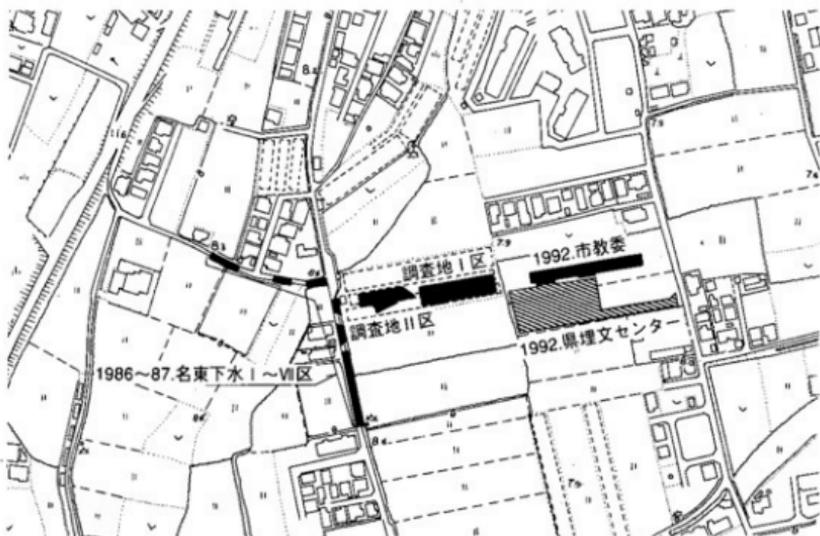
I 名東遺跡 (住宅開発工事)

1 調査に至る経緯と経過 (第1図)

名東遺跡は鮎喰川の旧河川が形成した標高T. P. +7m前後を測る沖積微高地上に位置する縄文時代～江戸時代に至る集落遺跡である。複合遺跡としての性格を持ちながらも、各時代の社会復原にはまだまだ多くの情報が必要とされているのが現状である。特に弥生社会の復原については、1987年の銅鐸の発見を契機に、数次におよぶ調査を経た今日においても、集落の構造および広がりさらには存続期など、数多くの問題が山積みされている。

調査地は1986年に始まる名東西都市下水道建設工事に伴う調査地に東接¹⁾し、また1992年の宅地造成工事²⁾や建設省名東宿舎建設工事に伴う調査地³⁾に西接する。1986年の調査では、弥生時代の方形周溝墓が確認され、また1992年の調査では弥生時代後期終末の竪穴住居跡が確認されていることから、必然的に弥生集落の存在が確実視された。

事業者との協議において、試掘調査の実施により遺跡の存在を明確化した上で、本調査の実施に至った。調査は共同住宅建設部の620㎡(調査地Ⅰ区)と進入道路部280㎡さらに周溝墓の確認に伴う部分拡張の100㎡(調査地Ⅱ区)の計1,000㎡を対象に実施した。



第1図 調査地位置図

2 基本層序

調査地周辺の標高は現地表面がT. P. +8.0mを測り、現代水田耕作土層（0層）下に第1～10層が堆積する。以下、上位より概略する。

第1層：黄橙色シルトで層厚5cmを測る。0層のFe沈澱層。

第2層：灰白色砂質シルトで層厚4cmを測る。旧耕作土。

第3層：黄橙色シルトで層厚2cmを測る。2層のFe沈澱層。

第4層：灰白色砂質シルトで層厚4cmを測る。旧耕作土。

第5層：黄橙色シルトで層厚2cmを測る。4層のFe沈澱層。

第6層：灰白色砂質シルトで層厚10cmを測る。旧耕作土。

第7層：黄橙色シルトで層厚8cmを測る。6層のFe沈澱層。

第8層：浅黄色粘土質シルトで層厚10cmを測る。旧耕作土。

第9層：黒色シルトで層厚15cmを測る。弥生時代の土器を含む遺物包含層である。調査地Ⅰ区では認められるが、調査地Ⅱ区では削平のため残存しない。

第10層：黄色シルトで遺構検出ベース層である。

第1～8層は土壌の酸化還元作用を受けた旧水田耕作土層

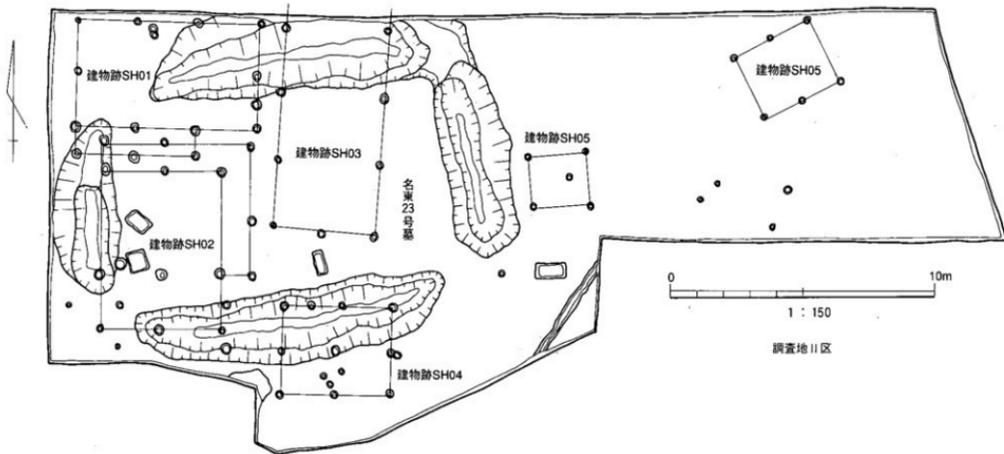
3 調査概要（第2図）

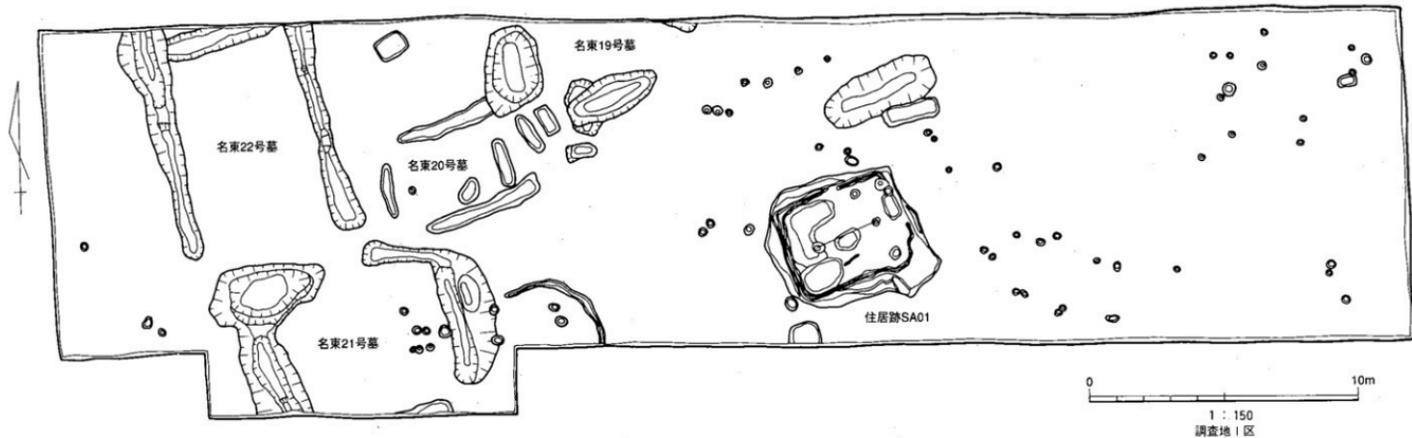
調査地Ⅰ・Ⅱ区共に現代水田耕作土層（0層）下60cmの第10層（黄色シルト）上面において、掘立柱建物跡6棟、方形周溝墓5基、土器棺墓2基（内1基は周溝内埋葬）、竪穴住居跡1棟の他、溝、土壌を確認している。調査地Ⅱ区検出の方形周溝墓（名東23号墓）については、調査地の拡張を実施し、遺構の全容解明に努めた。また土器棺墓SI01については遺構の切り取り作業を行い、第17回埋蔵文化財資料展において公開展示後、遺物の取り上げを行った。以下、主な遺構と遺物について概略する。

（i）掘立柱建物跡（第2図）

①掘立柱建物跡SH01

調査地Ⅱ区において検出した、桁行3間×梁行2間の東西棟の南桁西側から2間の底を持つ掘立柱建物跡である。柱穴の平面形は径20～30cmの円形あるいは不整形円形を呈し、深さ10～20cmを測る。柱間寸法は北側桁行が西より2.2-2.3-2.3m、西側梁行が北より1.8-2.1m、底1.0mを測る。





②掘立柱建物跡SH02

調査地Ⅱ区において検出した、桁行の北側より2列目および南東隅の庇柱が確認されないが、桁行3間×梁行2間の南北棟の北側および東側の二面に庇を持つ総柱建物跡であると考えられる。柱穴の平面形は径10～40cmの円形あるいは不整形円形を呈し、深さ10～40cmを測る。柱間寸法は西側桁行が北から庇1.1m、4.0(2.0-2.0)-2.0m、南側梁行が2.0-2.0mを測る。

③掘立柱建物跡SH03

調査地Ⅱ区内において、桁行3間×梁行2間分を検出した南北棟の側柱建物跡である。柱穴の平面形は径20～30cmの円形あるいは不整形円形を呈し、深さ10～40cmを測る。柱間寸法は西側桁行が北から2.3-2.5-2.5m、南側梁行が西から1.8-2.1mを測る。

④掘立柱建物跡SH04

調査地Ⅱ区において検出した、桁行2間×梁行2間の東西棟の総柱建物跡である。柱穴の平面形は径10～20cmの円形あるいは不整形円形を呈し、深さ10～50cmを測る。柱間寸法は南側桁行が西から2.1-2.1m、西側梁行が北から1.6-1.6mを測る。

⑤掘立柱建物跡SH05

調査地Ⅱ区において検出した、桁梁1間の建物跡である。柱穴の平面形は径20～30cmの円形あるいは不整形円形を呈し、深さ10～20cmを測る。柱間寸法は桁梁行ともに2.1mを測る。

⑥掘立柱建物跡SH06

調査地Ⅱ区において検出した、桁行2間×梁行1間の南西～北東棟の側柱建物跡である。柱穴の平面形は径20～30cmの円形あるいは不整形円形を呈し、深さ10～20cmを測る。柱間寸法は北側桁行が西から1.5-1.5m、梁行が2.4mを測る。

(ii) 方形周溝墓(第2～11図・図版1～11, 15～27)

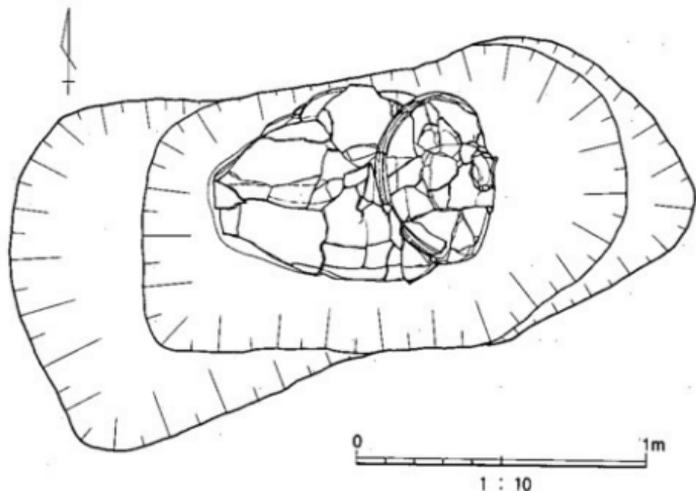
①名東19号墓

調査地Ⅰ区内において、南・西周溝および東周溝の一部を検出している。平面形は推定長辺5m、短辺3mを測る長方形を呈するものと考えられる。周溝は幅1.5～2.0m、深さ1.0mを測り溝底部は急激に立ち上がり収束し、四隅が途切れる形態を示す。主体部は確認されない。南周溝に近接して土器棺墓SI01が見られる。土器棺は平面形が長辺1.2m、短辺60cmの不整形円形の土壌内に斜位で埋置されている。棺には甕(6)を転用し、脚部を打ち欠いた高坏(5)を蓋として使用する。棺内遺物は見られない。南周溝から甕(1,2)、水差し形(3,4)が出土している。

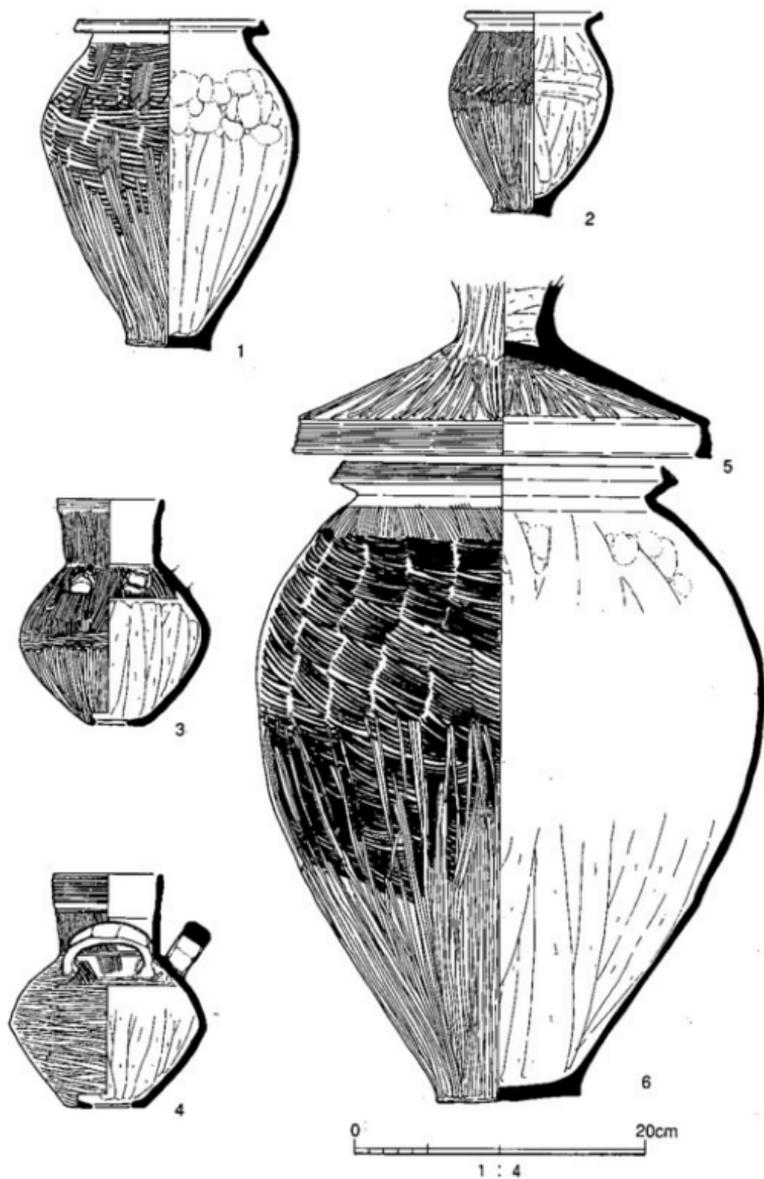
甕1は口縁端部を折返し、端面は凹面を呈する。体部上位1/3で最大径を持ち、最大径部よりやや上位に刺突文が巡る。体部外面は横位もしくは右下がりのタタキ後、上位には縦位ハケ、下位は縦位ヘラミガキ、体部内面は上位1/3にユビオサエ、下位2/3は縦位ヘラケズリが施される。甕2は口縁端部を上へ摘み上げ、体部上位1/3の最大径部に刺突文を巡らす。体部外面は縦位ハケ後、下半に縦位ヘラミガキ、体部内面中位に横位ヘラケズリ、上下位に縦位ヘラケズリが施される。

水差し形3の口頸部は直立し、口縁端部直下に1条凹線が巡る。体部1/2に最大径を持つソロバン玉状を呈する底部穿孔土器である。外面頸部～体部上半には縦位ハケ、体部中位には横位ヘラミガキ後、下半には縦位ヘラミガキが施される。体部内面は縦位ヘラケズリである。水差し形4の口頸部は直口し、口頸部に6条、頸部と体部の屈曲部に1条凹線が巡る。体部1/2に最大径を持つソロバン玉状を呈し、水差し形3より体部屈曲は明瞭である底部穿孔土器である。外面口頸部～体部上位に縦位ハケ、体部外面には横位ヘラミガキが施される。体部内面は縦位ヘラケズリである。

土器棺蓋5（高坏転用）は皿形の坏部を呈し、口縁部は坏部より直立し端部内外面をわずかに引き出し端面は平坦を呈する。口縁部外面に4条凹線が巡る。接合は円盤充填である。坏部および脚柱部外面には縦位ヘラミガキ、坏部内面はヘラミガキ、脚柱部内面には横位ヘラケズリが施される。棺6（甕転用）は口縁部を折返し、端面に3条凹線が巡る。体部外面には横位もしくは右下がりのタタキ後、上位には縦位ハケ、下半には縦位ヘラミガキ、体部内面には縦位ヘラケズリが施される。



第3図 土器棺墓 S101



第4图 名东19号墓南周濬(1~4), 土器棺墓 S101(5,6) 出土遺物

②名東20号墓

平面形が長辺5.3m、短辺3.0mの長方形を呈し、幅50cm、深さ10cmの四隅が途切れる形態の溝が巡る。主体部は見られない。

③名東21号墓

北・東溝および西・南溝の一部を確認している。平面形が長辺6.0m、短辺5.0mの長方形を呈し、幅50cm～2m、深さ60～70cmの途切れる形態の溝が巡る。西周溝から北周溝への繋がりが不整合であり分離されるべき可能性が考えられ、本来の周溝形態はL字溝の組み合わせにより二隅で途切れるものとも考えられる。もしくは土壇状遺構を周溝の一部に取り込んだことによる不整合とも考えられる。東周溝に土壇状の落ち込みが見られ、周溝内埋葬あるいは埋葬祭祀の痕跡を示すものと考えられる。主体部は見られない。東周溝の上層において土器の廃棄が見られ、下層より供献土器と考えられる甕(12)、短頸壺(13)が出土している。

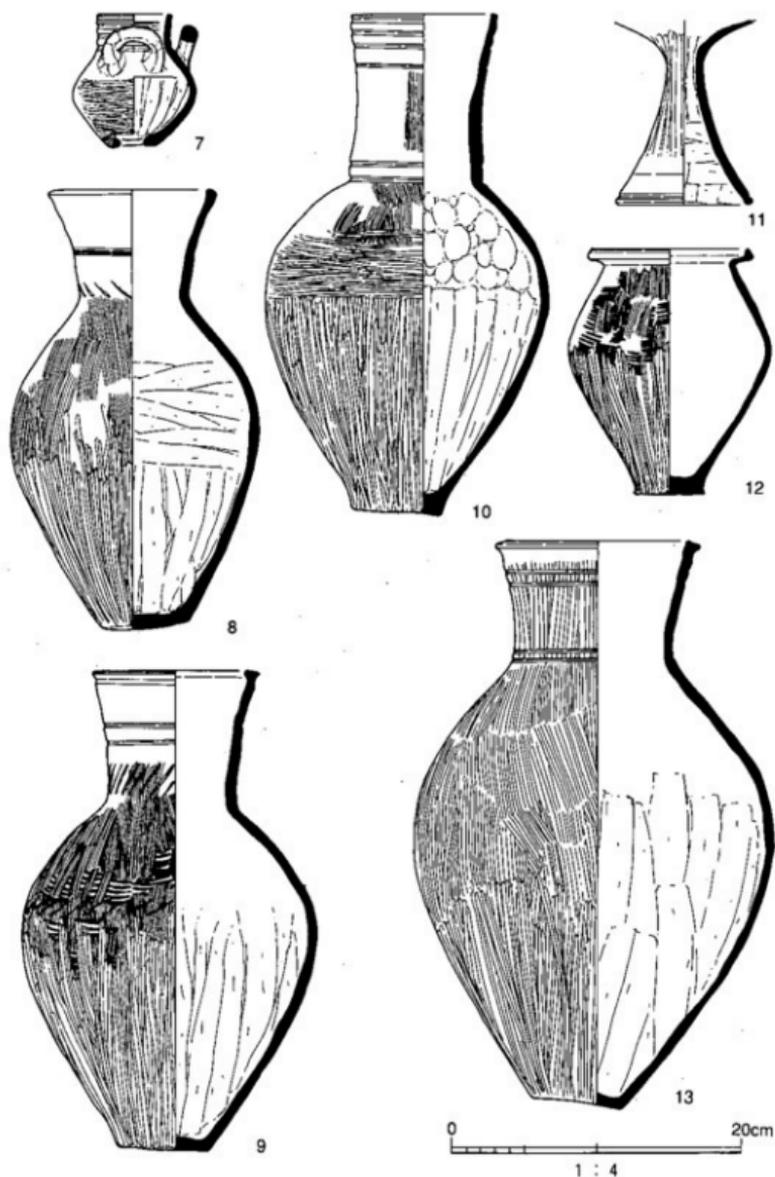
甕12は口縁端部を折返し、端面はわずかに凹面を呈する。体部中央よりやや上位に最大径を持つ。体部外面にはタキ後、上半に縦位ハケ、下半に縦位ヘラミガキが施される。短頸壺13は口頸部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部外面をわずかに引き出し、端面は凹面を呈する。口縁部直下に2条凹線、口頸部下位に2条凹線が巡る。体部外面には縦位の粗いハケ後、下半には縦位ヘラミガキ、体部内面は縦位ヘラケズリが施される。

④名東22号墓

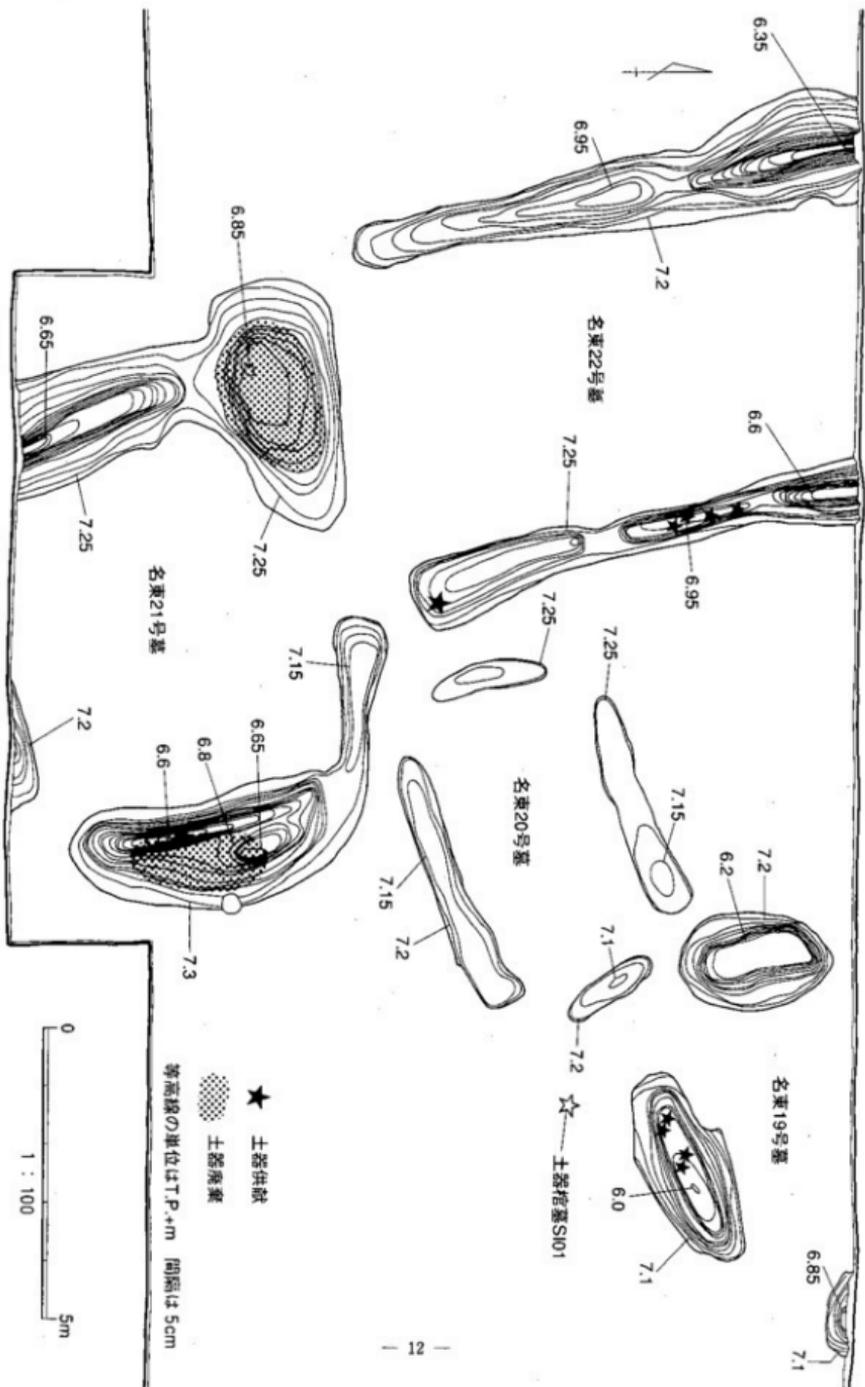
調査地内において幅70cm～2m、深さ70～90cmの東・西周溝の2条の溝を検出しており、平面形が推定長辺10m、短辺5mの長方形を呈するものと考えられる。南周溝については21号墓の北周溝と共用している可能性も考えられる。東・西周溝の底部には土壇状の落ち込みが見られ、東周溝よりミニチュア水差し形(7)、短頸壺(8,9)、直口壺(10)、高環(11)が出土している。

ミニチュア水差し形7は口頸部に4条凹線を巡らせ、体部中央に最大径を持つソロバン玉状を呈する底部穿孔土器である。体部外面には横位ヘラミガキ、体部内面は縦位ヘラケズリが施される。

短頸壺8は口頸部が斜め上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部内面がわずかに肥厚する。頸部中位に1条凹線、頸部下位に刺突文が巡る。体部外面には縦位ハケ後、縦位ヘラミガキが施される。体部内面下位に縦位、中位に横位ヘラケズリが施される。短頸壺9は口頸部が斜め上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部が内外面がわずかに肥厚する。口縁端部直下に1条、口頸部中央に2条凹線、頸部下位に刺突文が巡る。体部外面にはタキ後、上半に縦位ハケ、下半に縦位ヘラミガキが施され、体部内面には縦位ヘラケズリが施される。直口壺10は頸部が直立後、緩やかに外方に開き口縁部に至る。口縁部直下に4条凹線、頸部下位に2条凹線が巡る。頸部外面に縦位ハケ、体部外面に縦位ハケ、下半に縦位ヘラミガキ、中位に横位ヘラミガキ、体部内面にユビオサエ+縦位ヘラミガキが施される。



第5图 名東22号墓東周溝(7~11)、名東21号墓東周溝(12、13)出土遺物



第6図 名東19~22号墓

★ 土器供献
 ■ 土器廃棄
 等高線の単位はT.P.+m 間隔は5cm

0
 1 : 100
 5m

⑤名東23号墓

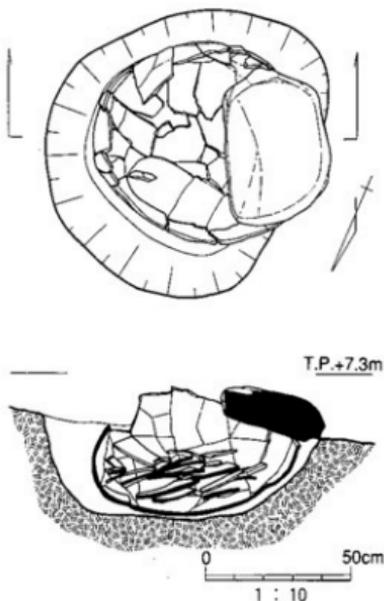
平面形が長辺12m、短辺7mの長方形を呈し、幅2.5～3.0m、深さ1.0～1.2mを測る収束する溝により区画されるが、北東隅部は浅い溝が巡り北・東溝は結合されている。周溝埋土は上層と下層に大別される。また南周溝の東部において、周溝内埋葬と考えられる土器棺墓S102が検出されている。土器棺(44)は広口壺の頸部以上を除去したものを棺転用し、横位に埋置し石版を蓋に使用している。上層出土遺物に甕(14～23, 26)、広口壺(24)、ミニチュア壺(25)、高坏(27)二重口縁壺(28)、受口口縁壺(29)、鉢(30～39)、小型丸底鉢(40～43)、下層出土遺物に甕(45～48, 52)、短頭広口壺(50, 51)、高坏(53, 54)、土製紡錘車(49)がある。

甕の口縁形態にはくの字状に屈曲し端部を丸くおさめる(14, 15, 22)、端部が方形断面もしくはわずかに外面に引き出されるもの(16, 17, 20, 21, 23, 26)、端部を上方にわずかに積み上げるもの(18, 19)がある。14, 16, 22の体部内面は頸部までヘラケズリが施され、21は体部内面下半に縦位のヘラケズリ、上位にハケが施される。26の体部内面には縦+横位ヘラケズリ、頸部には横位ハケが施される。19の体部外面はタタキ後、縦位ハケ、体部内面は下半に縦位ヘラケズリ、上半にユビオサエが施される。14, 17, 19, 21, 22, 23の口縁部には叩き出しの痕跡が見られる。

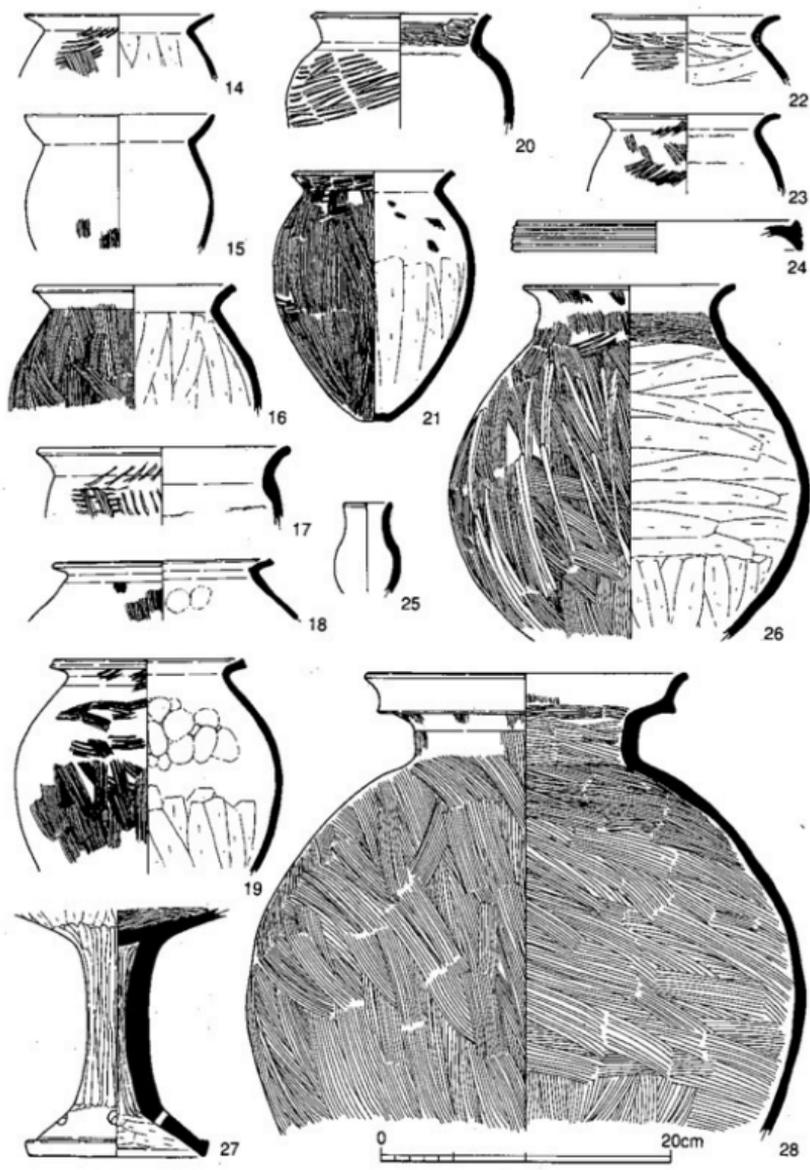
広口壺24は口縁端部を上下に拡張し、端面には4条凹線が巡る。高坏27は脚柱部から脚部への屈曲が明瞭で脚端部を肥厚させる。外面に縦位ヘラミガキ、接合は円盤充填である。二重口縁壺28は口縁部が短く外反し、体部内外面ともに粗いハケが施される。受口口縁壺29は外反する頸部に直立する受口状の口縁部を持ち、端部は内面にわずかに肥厚する。口縁部外面には2条波状文、頸部～体部上半には櫛描直線文と波状文により加飾される。

鉢30, 36～39は皿状、33, 34はボール状、31は深鉢形、32, 35は口縁部を屈曲させる形態である。30の内面はハケが施され、底部は平底である。31の外面はタタキが施され、小さな平底は穿孔される。35の口縁部～体部外面は縦位ハケ、口縁部内面に横位ハケが施される。36, 39は内外面ハケ、38の外面にはタタキ痕が残る。

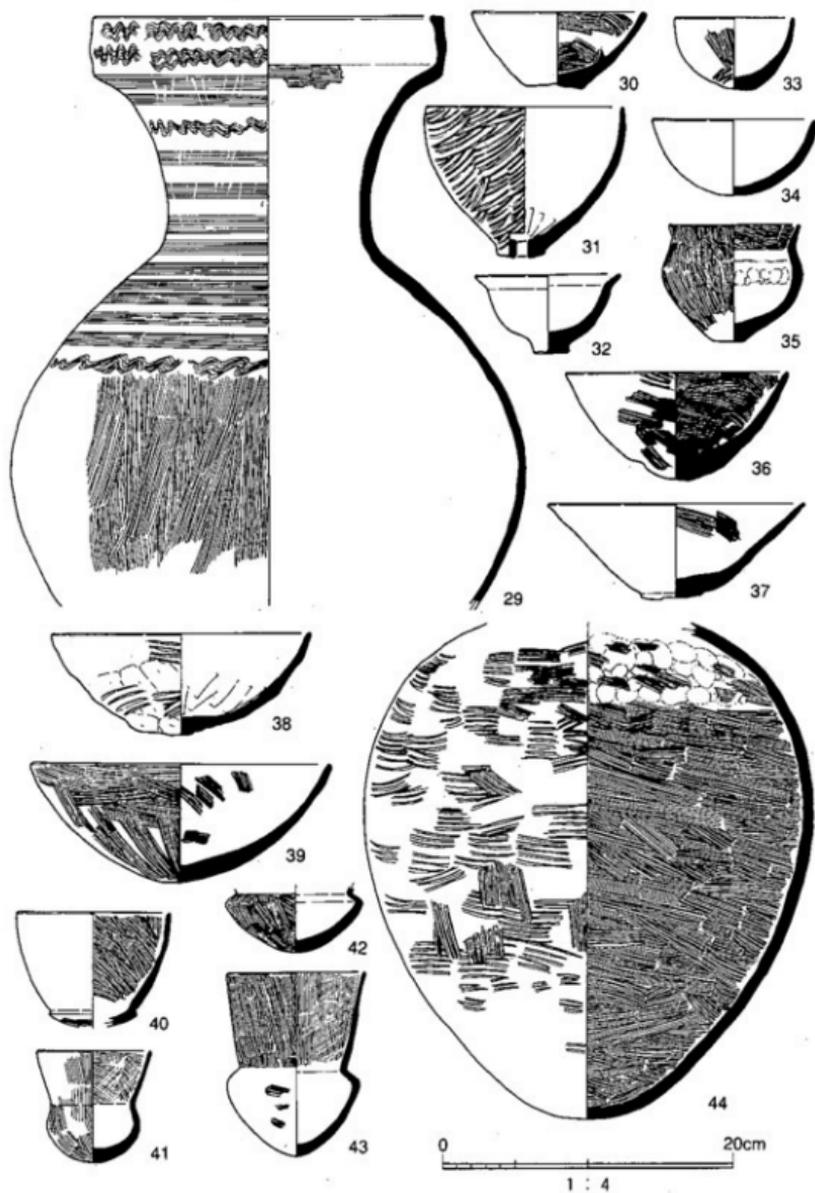
小型丸底鉢40は扁平の体部に内弯気味に立ち上がる口頸部をもつ。40～43のように体部が深くなる変化を遂げるものと考えられる。



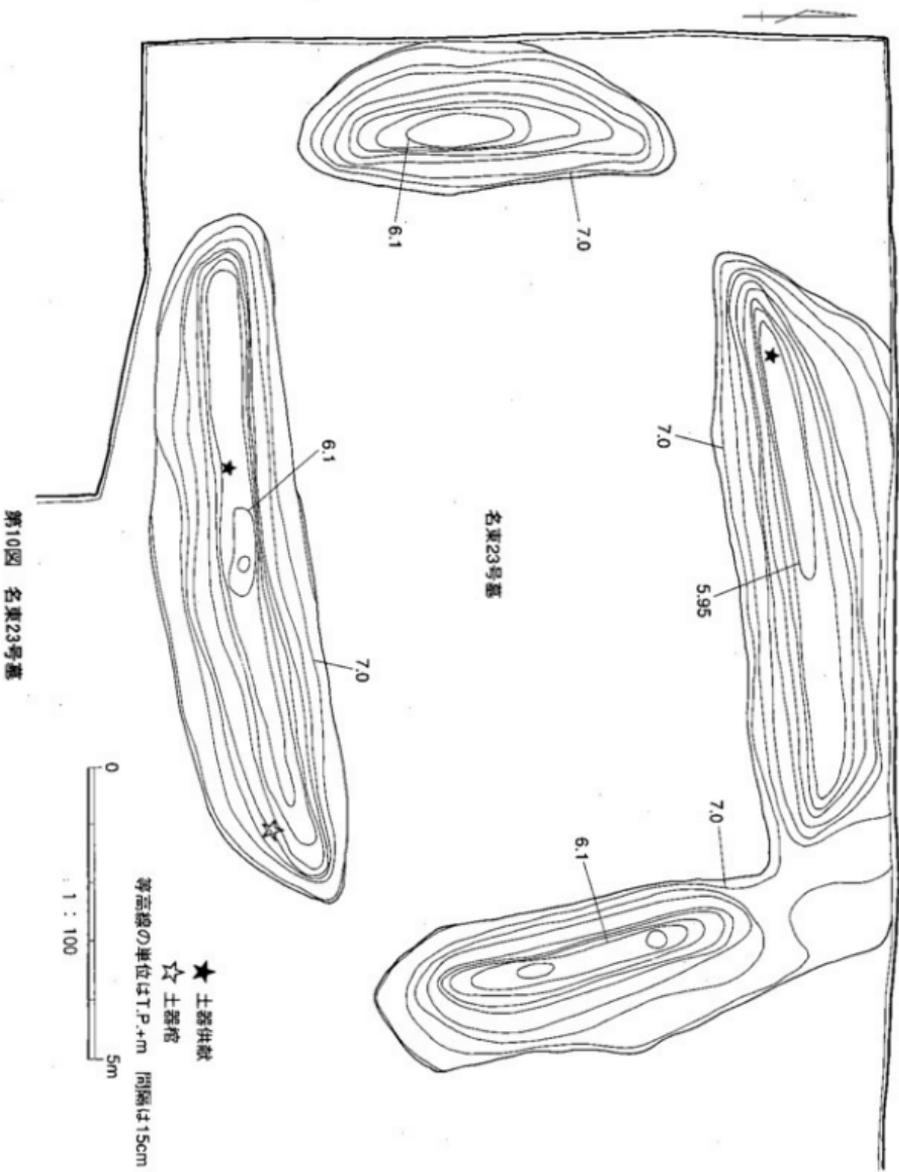
第7図 土器棺墓 S102



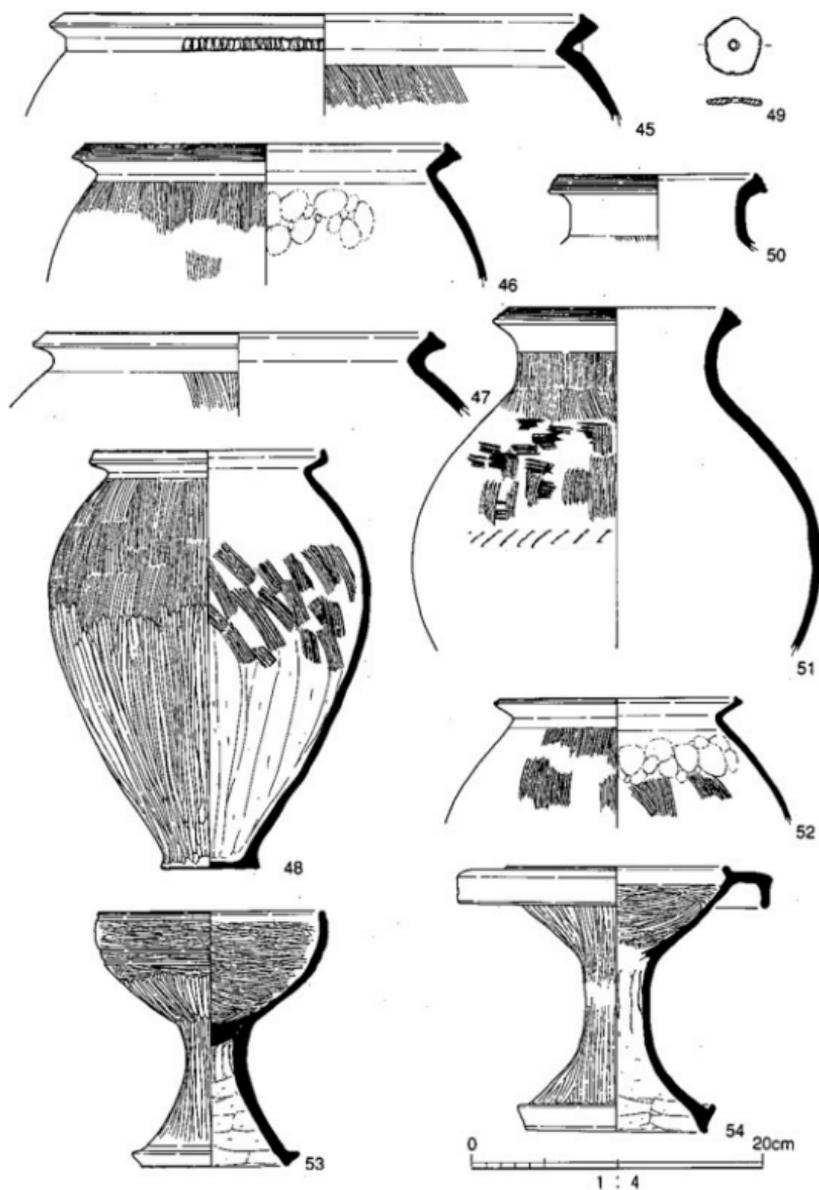
第8图 名東23号墓周溝上層(14~28)出土遺物



第9图 名東23号墓周溝上層(29~44)出土遺物



第10図 名東23号墓



第11圖 名東23号基周溝下層(45~54)出土遺物

41~43の体部屈曲は明瞭であり、口頸部は直線的に外方に立ち上がり、底部はわずかな尖底を呈する。41は球形体部に外反する口縁部を持つ。調整はいずれも内外面ハケである。

土器棺44は倒卵形の体部を呈し、体部外面にはタキ、体部内面は横位のハケ、内面上位にはユビオサエ後ハケが施されている。

甕45は口縁端部内面をわずかに肥厚させ、器壁は厚い。端面は平坦を呈し、頸部には貼付指頭圧痕文を持つ。46, 47は口縁端部の内外面を拡張し、46の口縁端部端面には4条凹線が巡り、47の口縁端面は凹面を呈する。48は口縁端部を折返し、端面は凹面を呈する。体部上位1/3に最大形を持ち、体部外面上半に縦位ハケ、下半に縦位ヘラミガキ、体部内面下半に縦位ヘラケズリ、中位にはハケが施される。52は口縁端部を積み上げ、端面には擬凹線が巡る。体部外面にハケ、体部内面はユビオサエ+ハケが施される。52は上層の混在資料であろうか。

短頸広口壺50は直立する頸部から短く外反する口縁部を持ち、端部内外面を拡張し、端面には3条凹線が巡る。51の口縁部の屈曲は50に比して急激ではなく、口縁端部内外面の拡張も顕著でない。端面には4条凹線が巡る。頸部外面には縦位ハケ、体部外面上半にはタキ後縦位ハケ、中位に刺突文が巡る。

高坏53は碗形の坏部を呈し、口縁部直下に1条およびやや下がった位置に2条の凹線が巡る。脚端部外面は断面三角形に肥厚し、端面は凹面を呈する。坏部外面上半に横位ヘラミガキ、下半に縦位ヘラミガキ、脚部外面には縦位ヘラミガキが施される。接合は円盤充填である。54は水平口縁を持ち、口縁端部を垂下させる。脚端部は内外面に肥厚し、端面は凹面を呈する。外面は縦位ヘラミガキ、坏部内面は横位ヘラミガキが施される。接合は円盤充填である。53, 54は供献土器である。

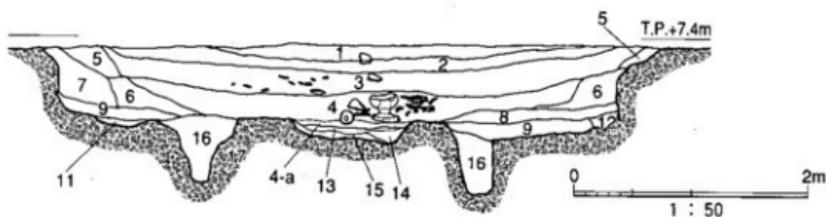
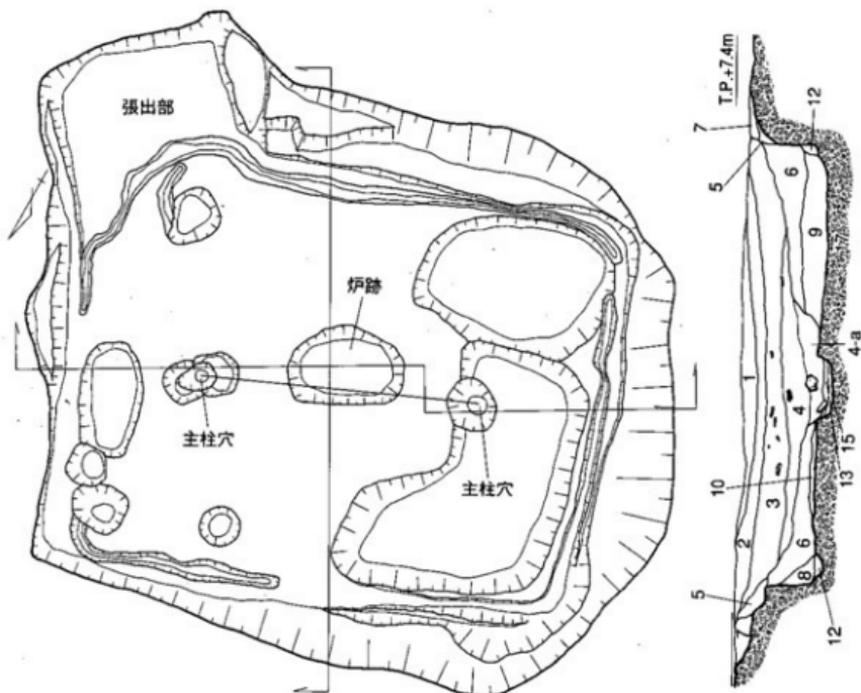
(iii) 竪穴住居跡(第12~15図・図版12~14, 28~33)

①竪穴住居跡SA01

平面形が長辺5.5m、短辺4.5mの不整長方形の一部に、長辺2.0m、短辺1.0mの長方形の張出部を持つ。壁高は70cmを測り、幅10~20cm、深さ10cmを測る壁溝が巡るが連続しない。床面のほぼ中央部に長辺1.0m、短辺70cmの平面形が不整長方形を呈し、深さ15cmを測る土壌が存在する。底部に燃焼痕跡が見られることから炉跡と考えられる。主柱穴は2箇所を確認している。

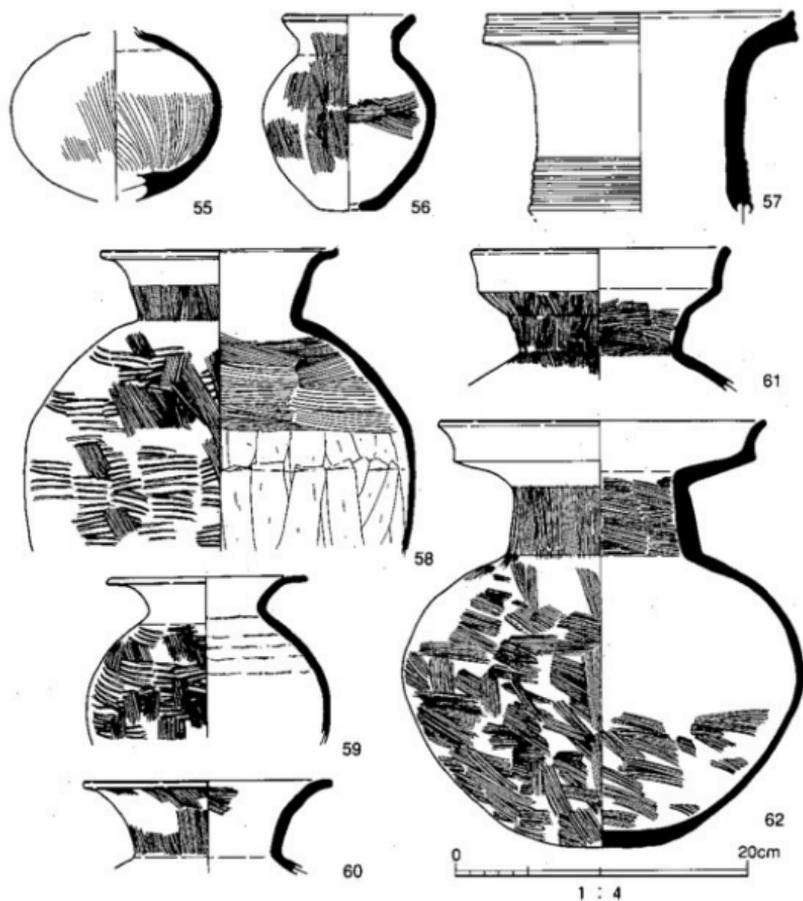
住居跡埋土は1~4-a層と5~10層に大別される。堆積状況は、まず住居外の崩壊土と考えられる1~10層堆積が周壁部から進行し、中央部に残されたレンズ状の凹地に1~4-a層が堆積する。出土遺物には細頸壺(55)、広口壺(56~60)、二重口縁壺(61, 62)、甕(63~83)、鉢(84~91)がある。

壺55は細頸壺の体部片であり体部は丸みを持つ。56は底部穿孔土器である。57は直線的に立ち上がる頸部から短く外反する口縁部を持ち、端部内面を拡張する。端面には2条、頸部下位



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒褐色シルト 2. 黒色シルト (上位より色調が暗) 3. オリーブ褐色シルト 4. 暗灰黄色シルト 4-a. 上位より色調が暗 5. 黄褐色シルト 6. 黄色シルト 7. に近い黄色シルト 8. 灰黄色シルトに黄色シルトが混在 (灰合) 9. 明黄褐色シルトに黄灰色シルトが混在 | <ol style="list-style-type: none"> 10. 黄土層 11. 灰色シルト 12. 灰オリーブ色シルトに黄色シルトが混在 (褐濁埋土) 13. 黄灰色シルトに黄色シルトが混在 14. 黒褐色粘土質シルト 15. 黄土・灰器 16. 黄灰色シルト (主柱穴埋土) 17. 黄色シルト |
|--|---|

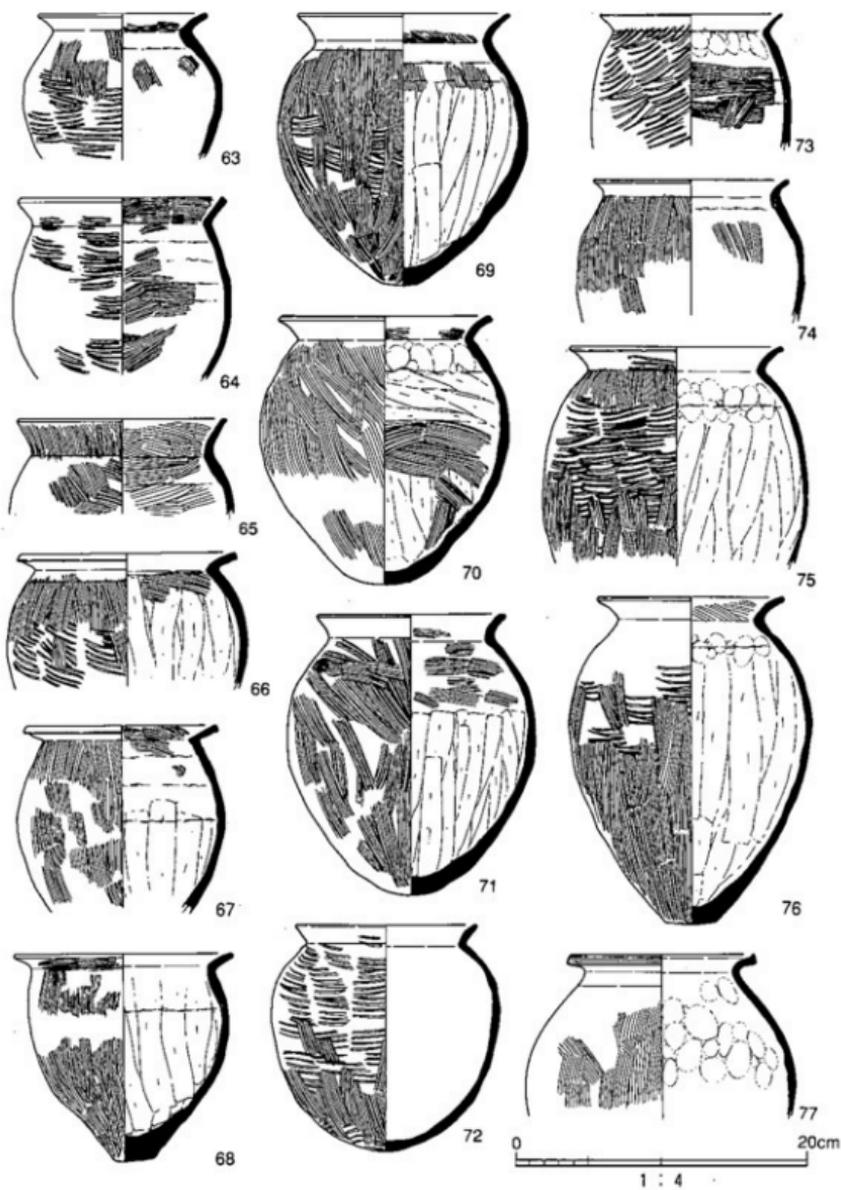
第12図 竪穴住居跡 SA01



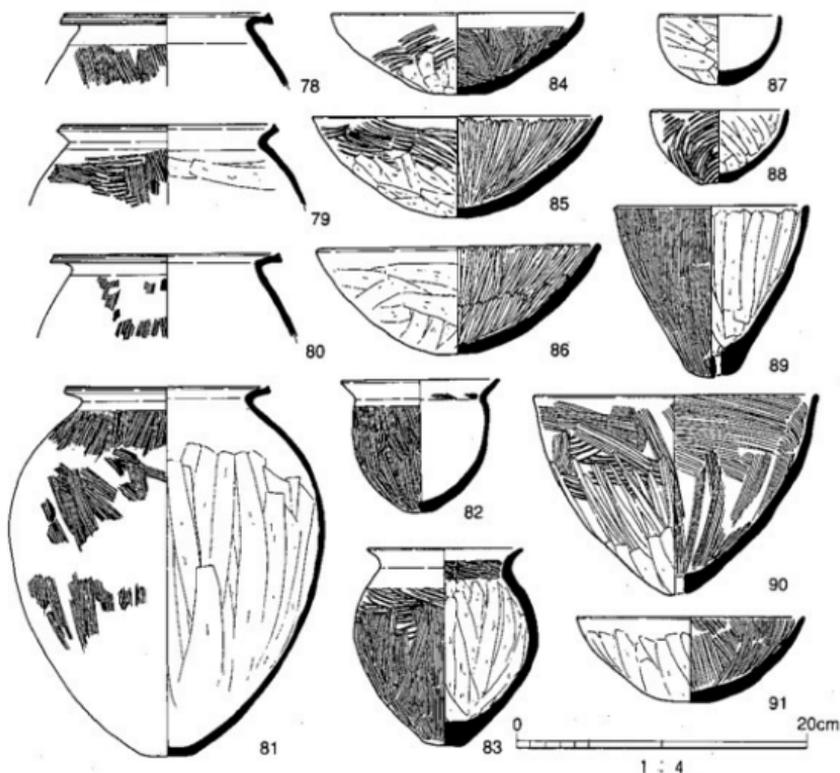
第13図 竪穴住居跡 SA01 (55~62) 出土遺物

には6条以上の凹線が廻る。58は口縁端部内面をわずかに上方に拡張する。頸部外面に縦位ハケ、体部外面には横位タタキ後ハケ、体部内面下位2/3に縦位ヘラケズリ、上位1/3には横位ハケが施される。59は体部から大きく屈曲外反する口頸部を持ち、口縁端部は断面方形を呈する。体部外面にはタタキ後ハケが施される。60は口頸部がラッパ状に開く形態を呈し、内外面ハケが施される。

二重口縁壺61は体部から外傾する口頸部に、緩やかに外反する口縁部を付け足す。口縁部の



第14図 竪穴住居跡 SA01 (63~77) 出土遺物



第15図 竪穴住居跡 SA01 (78~91) 出土遺物

屈曲は鈍い。頸部外面は縦位ハケ、内面は横位ハケが施される。62はハの字状に内傾する頸部から外方へ屈曲する口縁端部に、61より外反度の強い口縁部を付ける。口縁部の屈曲はシャープである。体部はタマネギ状の形態を呈し、底部は丸底である。頸部外面は縦位ハケ、体部外面には不定方向のハケ、頸部内面に横位ハケ、体部内面下位に横位ハケが施される。

甕63~76の口縁部はくの字状に屈曲し、口縁端部が丸味を持つもの、断面方形を呈するもの、端部外面がわずかに肥厚するものがあり、端面に擬凹線は廻らない。69~71は倒卵状、72は球状、76は長胴状を呈する。外面にはタタキ痕を残すもの、タタキ後ハケが施されるもの、ハケのみのもがある。体部内面にはヘラケズリ、ハケ、ヘラケズリ+ハケ、ヘラケズリ+ハケ+ユビオサエ、ヘラケズリ+ユビオサエがあり、64, 65, 67, 69~71, 76 口縁部内面には横位ハケが施される。68, 76の底部は小さな平底、69は尖底状、70~72は丸状の平底を呈する。64, 68, 72, 73, 75の口縁部は叩き出しによる。77~80の口縁端部内面は積み上げられ、端面には擬凹線が廻る。77の体部内

面上位1/3にはユビオサエ、78の体部外面はハケ、79の体部外面はタタキ後ハケ、体部内面上位には横位ヘラケズリ、81の体部外面はハケ、体部内面は縦位ヘラケズリが頭部近くまで施される。

鉢84～86は皿状を呈し、外面にはヘラケズリが施されるが、84、85はタタキ痕が残る。内面は84がハケ、85、86はヘラミガキが施される。87、88はボール状を呈し、87の外面はヘラケズリ、88の外面はタタキ、内面はヘラケズリが施される。89、90は口縁の内弯する深鉢形であり、82は口縁部を外反させる。89の外面は縦位ハケ、内面は縦位ヘラケズリ、89の外面はタタキ+ハケ+ヘラミガキ+ヘラケズリ、内面は縦横位ハケが施される。89、90は底部穿孔である。82の外面はハケである。

4 小 結

名東遺跡における弥生集落は経営時期に関して二つの構造を持っている。一つは弥生中期を中心とする集落であり、もう一つは弥生後期末～古墳時代初頭に営まれるものである。現在これら二時期の集落構造については残念ながら明確ではない。

竪穴住居跡SA01は方形住居の一隅に方形の張出部を有する平面形態を呈し、名東遺跡では弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけて普遍的に出現する住居形態である。1992年の調査¹⁰⁾でも時期的に同形態の住居跡が認められていることから、調査地周辺における当該期の集落の広がりが見込まれる。

また方形周溝墓の検出は、1987年の調査¹¹⁾での確認を皮切りに、今回の報告で23基を数える。特に名東23号墓はその規模において最大級の周溝墓とされる。名東19～23号墓の周溝埋土は上下層に大別され、上層からは弥生終末～古墳初頭、下層からは弥生中期末の土器が出土する。下層出土土器には供献土器が見られ、葬送時における土器を使用した祭祀形態を色濃く示しているものと考えられるが、21号墓の東周溝あるいは23号墓周溝上層の土器出土は周溝内への廃棄的な状況を示している。ただ23号墓では、上層において土器棺蓋SI02が見られることから、中期末を前後する時期に造営された周溝墓は、大幅な時間経過を経た後期末に至ってもなお「墓」としての意識・機能が全く否定されずに持ち得ていたのかもしれない。

方形周溝墓の周溝遺物に見られるこのような型式差は通常的であり、名東遺跡における弥生集落の時間的二重構造の結果の事象であるかもしれない。すなわち、時間的・型的な間隙の大きさは、銅鐸保有集落として中期を中心に経営された集落が、銅鐸埋納後に解体消失し、後期末に至り、突然的に集落経営が再開されると理解するものである。土器型式の検討も必要とされるが、土器型式におけるヒアタスを埋める明確な資料が確認されない以上、名東遺跡におけ

る集落経営の連続性も認め難い。

(引用文献)

- (1) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要1』1989年。
- (2) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要4』1994年。
- (3) 財団法人徳島埋蔵文化財センター『埋蔵文化財センター年報Vol.4 1992年度』1993年。
- (4) (2) に同じ
- (5) (1) に同じ

Ⅱ (仮称) 松熊神社集石状遺構 (阿波史跡公園整備工事)

1 調査に至る経緯等

徳島市政100周年記念事業の一環として、昭和63(1988)年度にスタートした阿波史跡公園整備事業の第一期工事において、歴史文化ゾーンである「古代の邑」への進入道路建設計画が上がった。阿波史跡公園は、県下最大級と呼称される古墳群が所在する気延山の東麓に位置し、公園整備予定総面積45.2haの範囲内には、前期古墳の宮谷古墳、奥谷1号墳、2号墳、後期古墳の矢野古墳、城山神社2号墳などが所在している(第1図)。

今回の調査地点は、八倉比売神社古墳群(1・2号墳)が立地する尾根がさらに東へ下り、途中、宮谷古墳が立地する南側尾根とに分岐した北側尾根の根元部付近、標高38m前後にあたる(第2図)。進入道路は、八倉比売神社へ続く参道から尾根上を横切り、松熊神社有地の北側斜面を掘削して敷設されるもので、そのルート上、特に尾根頂部の平坦面において箱式石棺や古墳の痕跡などが確認されることが予測されたので、徳島市公園緑地課と発掘調査について協議を行い、事前の試掘調査と工事時の立会調査を実施することで合意に達した。試掘調査は、平成2(1990)年8月から9月にかけて実施した。

なお、松熊神社社殿が建つ尾根の起伏部分や、その南西50m地点の洞のある突出部分(第2図)にも古墳等の存在が推測されるが、これらに関しては現在のところ確証は得られていない。



第1図 周辺の主な古墳位置図(1:10,000)

- | | | | |
|------------------|---------|-------------|--------|
| 1 (仮称) 松熊神社集石状遺構 | 2 宮谷古墳 | 3 八倉比売神社古墳群 | |
| 4 奥谷2号墳 | 5 奥谷1号墳 | 6 城山神社2号墳 | 7 矢野古墳 |



第2図 トレンチ配置概略図(1~12はトレンチNo)

2 調査の概要

調査は尾根の主軸ラインを中心に、拡張部を含め9箇所のトレンチによる試掘を実施した(第2図)。試掘面積は合計約65㎡である。調査地の一角にはかつて民家が存在していたらしく、宅地造成時の削平により本来の尾根地形が著しく変化を受けている場所もあった。

第6トレンチの岩盤直上で結晶片岩の列石が検出されたので、第7, 8, 10トレンチを設定し、列石の延長部を検出した。また第12トレンチでも同様の列石の一部を検出した。この列石については調査当初、古墳の基底部かと思われたが、調査を進めていく中で、石材の大きさや並べ方(積み方)などに墳丘の基底部構造的でない点を感じられたことや、トレンチ内から磁器の破片、小刀の鏝、寛永通寶などが出土したことから、近世以降の遺構と判断した。

第1, 3, 4, 5, 11トレンチでは遺構・遺物は検出できなかった。

第2, 9トレンチでは古墳時代の遺構・遺物が検出されたので、ここではこの両トレンチにおける調査概要を述べることにする。

(1) 層序

以下は第2トレンチでの層序であるが、隣接する第9トレンチも基本的に同一層序を成す。

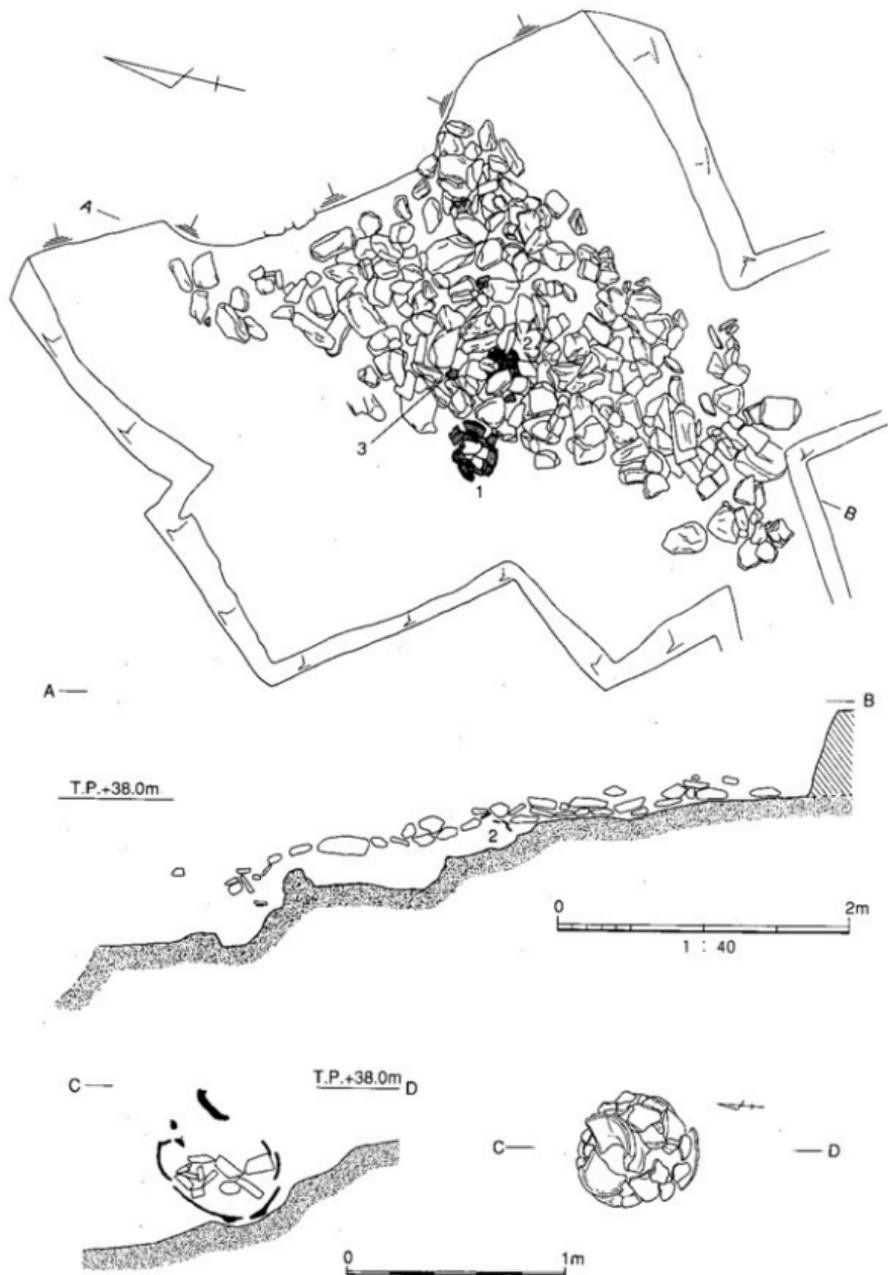
第1層:表土(腐葉土)で層厚10cm。第2層:にぶい黄橙色弱粘質土で層厚20cm。第3層:褐灰色混じりのにぶい黄橙色粘質土で層厚10~20cm。第4層:岩盤小礫を含む明褐灰色粘質土で層厚10~20cm。第4層の下は地山(岩盤)である。

(2) 検出遺構(第3図、図版2)

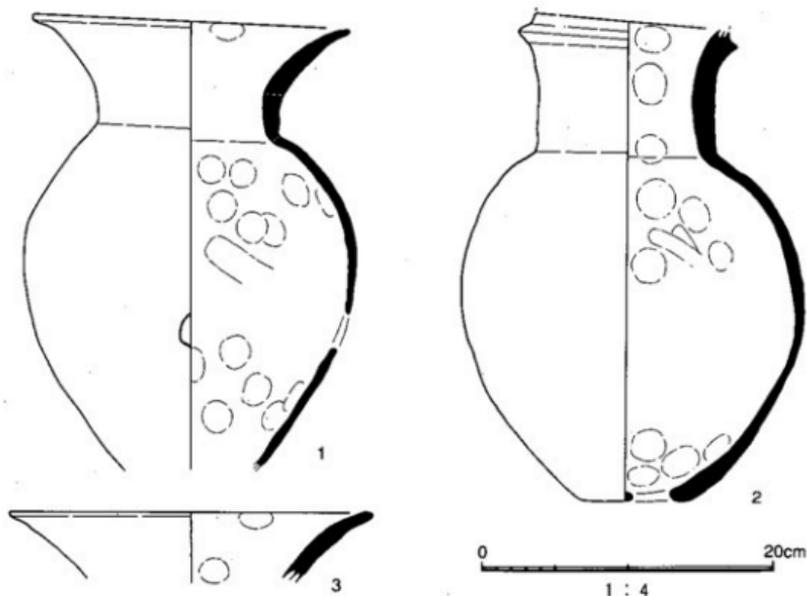
第2トレンチの発掘で、第4層下部から土器片が出土し結晶片岩礫が集中的に確認されたので、調査区を拡張し(第9トレンチ)、集石状遺構を検出した。¹⁾

集石状遺構は検出部で全長約4m、最大幅約2mを測り、岩盤の傾斜に沿って標高T.P.+37.5m~38.2mの範囲内に位置する。後世の地山掘削により遺構の一部が消失していたが、もとはさらに尾根の下方へ広がっていたものと考えられる。ちなみに遺構の主軸は南西-北東方向で、尾根の主軸方向と概ね一致している。

遺構はすべて結晶片岩(緑色片岩)礫によって構成され、他の石材は含まれていない。結晶片岩礫の大きさは10~20cm大のものが主体であるが、30~35cm大のものも含まれている。前者には剥落した岩盤のような軟質の礫もいくらか含まれるが、その他は後者も含め比較的硬質の礫である。しかしこれらの礫の配置に規則性はなく、大きさや材質(硬軟)の差により礫を意識的に使い分けて遺構を築いた形跡は窺えない。また集石は、上部への積み重ね(集積)がほとんど行われていないため高まり(厚み)を持たず、岩盤上に敷石状に存在するといった感がある。なお、遺構の北半部では岩盤の落ち込みが見られ、集石との間に20~30cmの厚みで土の堆積が認められたが、人為的に地山を掘り込んだと断定できる状況証拠は得られなかった。



第3圖 集石状遺構と壺形埴輪(2) 出土状況平面図・断面図



第4図 集石状遺構出土壺形埴輪

この集石状遺構に伴い遺物が出土した(図版3~5)。集石上にも破片の散在は見られたが、集石の脇と集石内からは壺形埴輪がほぼ原形復元が可能な状態で出土している。

(3) 出土遺物(第4図、図版5)

集石状遺構から出土した遺物はいずれも壺形埴輪で、最低3個体分が確認された。

壺形埴輪(1)は、集石状遺構西側の岩盤直上で出土した広口壺形の埴輪である。体部中央よりやや上位に最大径を有し、底部を欠損するが下半部への窄まりが顕著である。頸部~口縁部の器壁は体部に比して厚く、3cm程直立させた頸部から口縁部が先窄まりに大きく外反し、先端は丸く収める。磨滅が著しく体部外面に調整痕は認められない。内面には指押さえとナデの痕跡が認められる。体部中位には、推定径3~3.5cmの焼成前穿孔がなされている。焼成は比較的良好で色調は赤茶褐色を呈する。体部下位には黒色斑が認められる。胎土には結晶片岩粒・石英粒が含まれる。壺形埴輪(2)は集石内からの出土である。岩盤傾斜面のごく浅い窪み(人為的なものか自然地形かは不明)の中に置かれ、結晶片岩の集石で被覆されていた。ほぼ球形の体部に直立する頸部を持つ長頸の壺形埴輪である。口縁部は欠損して不明であるが、頸部から外反して延びるものと思われる。頸部と口縁部の境界部は断面三角形突帯状を呈する。底部はほぼ平底で、

直径2.5cmの焼成前穿孔がなされている。体部外面の調整痕は不明瞭である。内面は指押さえとナデの痕跡が認められる。焼成は比較的良好で色調は赤黄褐色を呈する。胎土には結晶片岩粒・石英粒が含まれている。壺形埴輪(3)は口縁部のみであるが、壺形埴輪(1)と同形態のものと思われる。

3 小 結

集石状遺構は、断片的な検出に終わったためその性格については不詳な点も多いが、壺形埴輪の出土を考慮する限り、本来古墳が存在していたことが想定される。削平により尾根上面の一部が消失した東～北東部に、主体部を伴う墳丘が存在していたのであろうか。集石は岩盤直上に位置するものであり、それ自体が墳丘を構築した当初の姿でないことは明瞭である。また、集石の遺存状態や壺形埴輪(2)の出土状況から、それらが墳丘斜面あるいは墳頂部からの転落状況を示していると見るにも問題があると思われる。可能性としては、墳丘裾部に敷石によって構築されたテラス状の(あるいは突出部的な?)施設の一部とも考えられるが不明である。

遺構の時期については壺形埴輪に類する所となるが、県内では壺形埴輪の出土事例が少なく、当該地域での編年的な位置付けは困難である。壺形埴輪(1)は、たとえば板野町蓮華谷2号墳の主体部棺外出土の土師器広口壺(布留Ⅰ式最古相)に見られる胴部の張りが退化し長胴化したような形態を示しており¹²⁾、この系譜を引く流れの中で壺形埴輪の一形態として採用されたものであろう。また、壺形埴輪(2)については口縁部を欠くものの、頸部以下のプロポーション・整形・法量などに、石井町清成古墳(4世紀後半)から出土した壺形埴輪との類似点が認められる¹³⁾。このことから、集石状遺構の時期を4世紀後半頃に位置付けておきたいが、周辺地域での出土事例などとの比較も含めて、今後なお検討の必要があると思われる。

ただ今回の調査区内では円筒埴輪は出土していない。ごくわずかな調査面積ゆえにこの点については偶然の可能性もあるが、推考すれば、この集石状遺構は、前述のような古墳の一構成部分ではなく、壺形埴輪に供献土器的な意味を持たせ、そのみを用いた(供献した)単独の集石墓あるいは何らかの祭祀的遺構であったかも知れない。

(註)

- (1) 古墳あるいはその他墓として断定できていないため、ここでは仮りに集石状遺構とした。
- (2) 「蓮華谷古墳群(Ⅱ)」徳島県教育委員会ほか『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告4』1994年。
- (3) 清成古墳出土壺形埴輪については、徳島県立博物館高島芳弘氏の御厚意により実見させていただいた。

Ⅲ 矢野遺跡・阿波国府跡 (市道拡幅工事)

1 調査に至る経緯と経過 (第1図)

調査地は国府町矢野の四国電力国府変電所の東100mに位置し、弥生時代後期終末～古墳時代前期の著名な集落遺跡である矢野遺跡と阿波国府跡推定領域にも含まれる地域である。

矢野遺跡は站喰川水系の旧河川が形成した標高T. P. +8m 前後の沖積微高地上に位置する縄文時代後期～中近世に至る集落遺跡であるが、従来は主として、四国電力国府変電所構内を中心に周辺に広がる弥生時代後期～古墳時代前期の集落遺跡として評価されてきた感がある。また阿波国府跡については1982年から10ヶ年継続による重要遺跡確認調査の経緯があり、第6次調査(1988)において、阿波国府跡関連の有力な資料を得ている。

しかしながら、これまでの矢野遺跡や阿波国府跡に対する遺跡観を変貌させたのは、やはり徳島南環状道路建設工事に伴う発掘調査(県埋蔵文化財センター)の成果が著しい。

矢野遺跡では、1992年の銅鐸の発見や旧地形の解明とともに理解されるべき当時の集落構成単位の復原、また殿治遺構に見られる特殊遺構の発見、さらには、従来発掘調査の手が及ばなかった沖積層低位からの縄文時代後期に関する資料の獲得など⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾がある。一方阿波国府跡については、1997年の観音寺における税調木簡の発見は最重要視されるものである。

今回の調査は徳島南環状道路周辺整備事業の一環である、市道カウケ・ヨツマタ線改良工事に伴うものである。事業内容は南北方向の幅2mの現道の拡幅および用排水路の改良工事である。現道拡幅に伴う擁壁新設部と三面張排水路の建設部(両者共に幅1.5m)を対象に実施した。



第1図 調査地位置図

2 基本層序

擁壁建設部の現状は水田であり、排水路建設部の現状は旧用水路および道路である。調査地周辺の現道路表面は標高はT. P. +9.7m、現代水田耕土面は標高はT. P. +9.4mを測り、周辺地域の中でも高所に位置する。調査地には現代水田耕土層（0層）下に第1～6層が堆積する。

以下、上位より概略する。

第1層：橙色シルト層で層厚5cmを測る。0層のFe沈殿層。

第2層：にぶい黄橙色シルト（含礫）層で層厚10cmを測る。旧耕作土。

第3層：灰黄褐色シルト（含礫）層で層厚10cmを測る。旧耕作土。

第4層：橙色シルト層で層厚5cmを測る。3層のFe沈殿層。

第5層：にぶい黄橙色シルト（含礫）層で層厚10cmを測る。旧耕作土。

第6層：黄色シルト～暗灰色砂礫層で遺構検出ベース層である。

第1～5層は酸化還元作用を受けた旧水田耕作土層。

3 調査概要（第2図、図版1）

擁壁建設部を調査地Ⅰ区、排水路建設部を調査地Ⅱ区とし、調査地Ⅰ区を1-a～1-eの小区に、また調査地Ⅱ区を2-a～2-dの小区に分けた。

調査地Ⅰ・Ⅱ区共に現代水田耕作土層下、約40cmの第6層（黄色シルト～暗灰色砂礫層）上面において掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝、土壌を検出している。調査地が缺少のため、遺構の全体像は把握されていない。特に多くの柱穴を検出しているが、柱穴の取りまとめが困難であり、建物跡の棟数や規模等については不明である。以下、主な遺構、遺物について概略する。

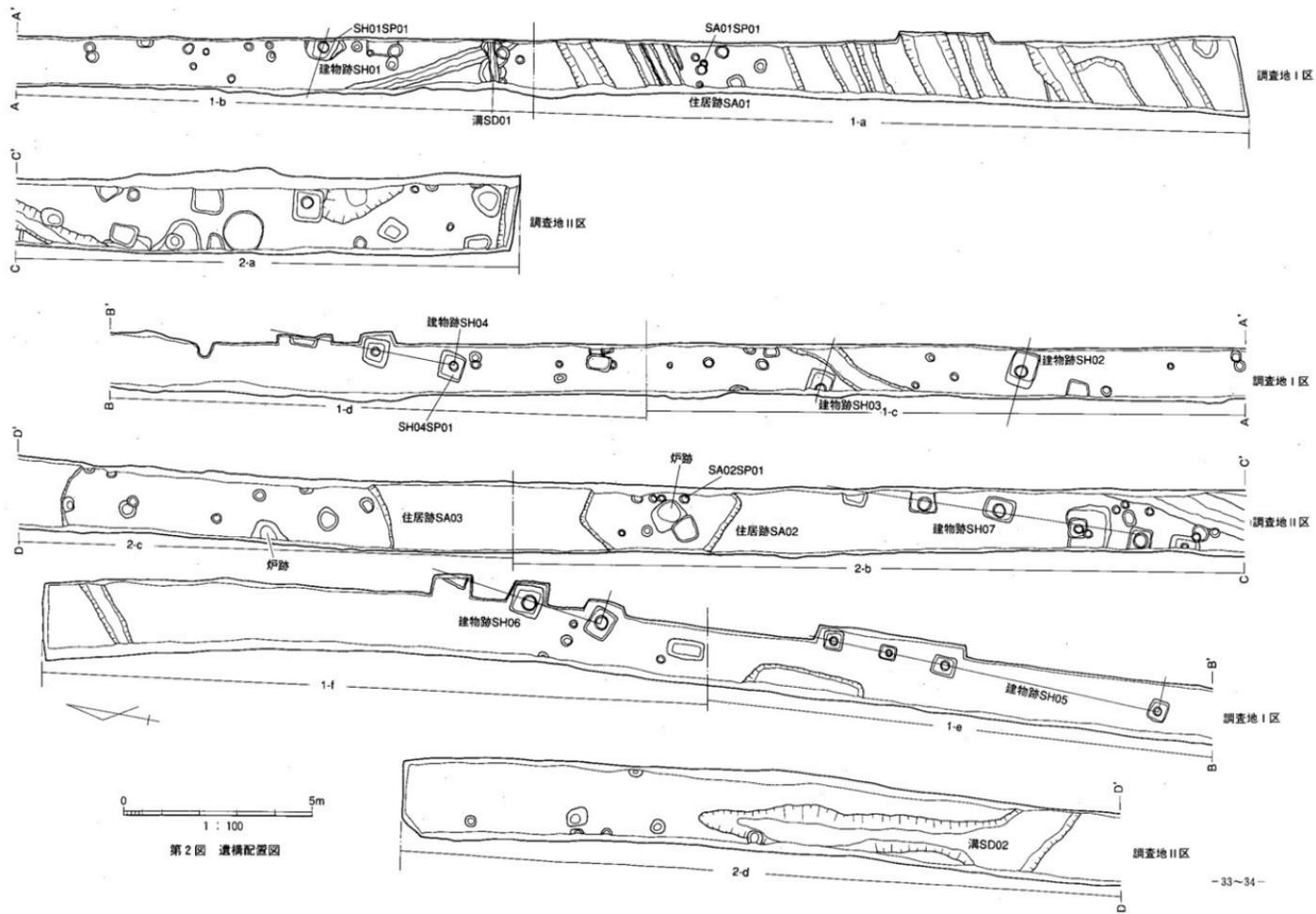
（1）柱穴（建物跡）（第2.3図、図版2～5.8）

（i）SP01（建物跡SH01）

調査地Ⅰ区1-bにおいて、調査地内において検出した長辺60cm以上、短辺80cmの長方形を呈し、深さ60cmを測る掘形に、径30cmの円形を呈する柱痕跡を持つ建物跡柱穴である。

柱穴掘形の方角から、想定される建物跡は正方位を示すものと考えられる。掘形内からは、多量の土師器、須恵器の小片が出土している。出土遺物には、土師器高台付坏（13, 14）、須恵器高台付坏（15, 16）がある。

高台付坏13, 14はいずれも赤色塗彩であり、高台は端部外面が外方にわずかに引き出されている。13の高台は短く、14の高台は幅が狭く高さを持つ。14の内面底部にはヘラミガキの痕跡が見られる。15の高台は矮小化し、13, 14のように端部外面が外方にわずかに引き出されたものである。16の高台端面には段を有する。



第2図 遺構配置図

(ii) SP02 (建物跡SH02)

調査地Ⅰ区1-cにおいて検出した長辺95cm、短辺70cmの長方形を呈し、深さ20cmを測る掘形に、径35cmの円形を呈する柱痕跡を持つ建物跡柱穴である。

柱穴掘形の方向から、想定される建物跡は正方位を示すものと考えられる。

(iii) SP03 (建物跡SH03)

調査地Ⅰ区1-dにおいて、調査地内において検出した長辺60cm以上、短辺60cmの長方形を呈し、深さ30cmを測る掘形に、径30cmの円形を呈する柱痕跡を持つ建物跡柱穴である。

柱穴掘形の方向から、想定される建物跡は正方位を示すものと考えられる。

(iv) SH04SP01 (建物跡SH04)

調査地Ⅰ区1-d内において2間分を検出した建物跡SH04の柱穴の一部である。平面形が長辺75cm、短辺70cmのほぼ正方形を呈し、深さ30cmを測る掘形に、径30cmの円形を呈する柱痕跡を持つ。柱間寸法は2.1m等間であり、建物方位は正方位を示す。

出土遺物には須恵器坏蓋(11)、坏(12)がある。坏蓋11は体部中位で段を有し、口縁部に至り端部を垂下に折り曲げる。外面1/2にヘラケズリが施される。坏12はハの字状に断面方形の高台が貼付られる。底部外面にヘラ記号が見られる。

(v) 建物跡SH05

調査地Ⅰ区1-e内において3間分を検出している正方位棟の建物跡である。北から2間の柱間寸法は1.5m等間であるが、3間目が5.7mと長大であり、別棟の建物柱穴であるとも考えられる。柱穴掘形は一辺40cmもしくは50cmの方形を呈し、深さ30cmを測る。柱穴は径20cmの円形を呈する。

(vi) 建物跡SH06

調査地Ⅰ区1-f内において2間分を検出している。柱穴掘形は一辺80cmの方形あるいは長辺80cm、短辺75cmのほぼ方形を呈し、深さ40cmを測る。柱穴は径35cmの円形を呈する。柱間寸法は2.1m等間である。建物跡は正方位を示す。

(vii) 建物跡SH07

調査地Ⅱ区2-b内において4間分を検出している。柱穴掘形は一辺50cmの方形あるいは長辺80cm、短辺60cmの長方形を呈し、深さ30cmを測る。柱穴は径30cmの円形を呈する。柱間寸法は南から1.5-2.0-2.0-2.0mを測る。建物跡は正方位を示す。

(2) 竪穴住居跡(第2,3図, 図版6~8)

(i) 竪穴住居跡SA01

調査地Ⅰ区1-aにおいて検出した一辺3.0mの方形住居跡と考えられる。幅15cmの周壁溝とみえらる溝が見られる。住居内SP01より広口壺(3)が出土している。

(ii) 竪穴住居跡SA02

調査地Ⅱ区2-bにおいて検出した一辺3.5mの方形住居跡と考えられる。壁高30cmを測り、周壁溝は見られない。中央部に長辺80cm、短辺65cmの平面形が長方形を呈し、深さ50cmを測る炭化土壌が見られ、炉跡と考えられる。出土遺物には短頸壺(1)、住居内SP01より甕(2)がある。甕2は口縁端部の内面を明瞭に摘み上げ拡張したもので、端面には擬凹線が巡る。体部外面にはハケ体部内面上位にはユビオサエ、下半には縦位ヘラケズリが施される。短頸壺1の外面には多条凹線がめぐり、空白帯には刺突文が施されている。端面には2条凹線が巡る。

(iii) 竪穴住居跡SA03

調査地Ⅱ区2-cにおいて検出した一辺7.0mの隅丸方形住居跡と考えられる。壁高30cmを測り周壁溝は見られない。住居内はほぼ中央部に、埋土に炭化焼土痕跡を示す土壌が見られ、炉跡であるとされる。出土遺物には広口壺(4)、甕(5)がある。

広口壺4は器壁が厚く、口縁端部内面は上方へ拡張し、端面には3条凹線+円形竹管文が施される。甕4は口縁部が断面方形を呈し、端部内外面がわずかに肥厚し、端面は凹面を呈する。体部外面にはハケが施される。

(3) 溝(第2,3図, 図版8)

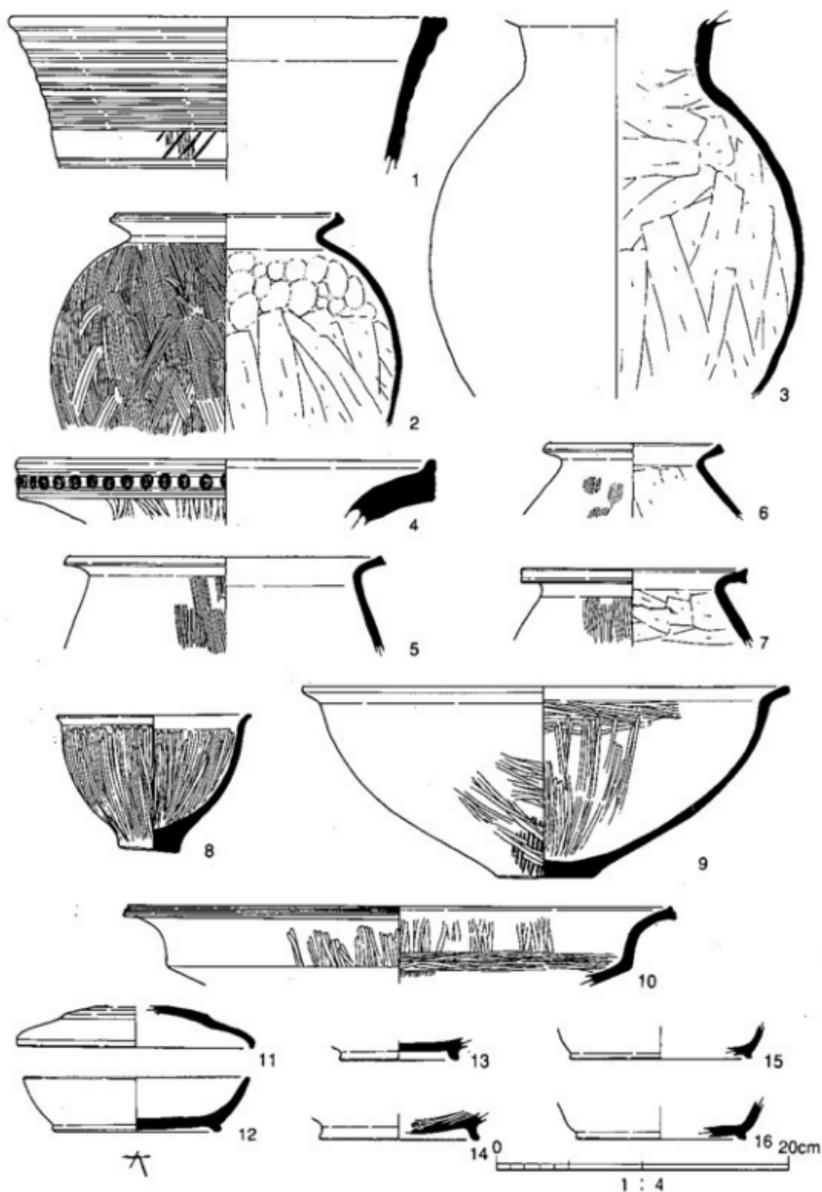
(i) 溝SD01

調査地Ⅰ区1-bにおいて検出した幅40cm、深さ40cmを測る東西方向の溝である。

出土遺物には甕(6,7)がある。甕6,7は口縁端部内外面を肥厚させ、端面は凹面を呈する。体部外面にはハケ、体部内面ヘラケズリが施される。

(ii) 溝SD01

調査地Ⅱ区2-dにおいて検出した幅1.0m、深さ20cmを測り、調査地内で収束する溝である。出土遺物には鉢(8,9)、高環(10)がある。鉢8,9は外反する口縁部を持ち、内外面ヘラミカが施される。高環10は大きく外反する口縁部を持ち、端面には擬凹線が巡る。内外面ヘラミカである。



第3図 竪穴住居跡SA01SP01 (3), SA02 (1), SA02SP01 (2), SA03 (4, 5), 溝SD01 (6, 7)
SD02 (8~10), SP01 (建物跡SH01, 13~16), 建物跡SH04SP01 (11, 12)



第4図 調査地周辺地形図

4 小 結

竪穴住居跡SA02、03の形態は不明確であるが、方形もしくは隅丸方形を呈し、周壁溝を伴わないものと考えられる。出土遺物から弥生時代後期末期に位置付けられ、従来、矢野遺跡では普遍的に発見される住居跡である。1987年の市道拡幅工事¹⁶や1990年の四国電力鉄塔建替工事¹⁷に伴う調査でも、ほぼ並行期の住居跡が確認されていることから、四国電力国府変電所構内を中心に広がると考えられる弥生集落の一画にあたるものと考えられる。

近年、徳島南環状道路に伴う調査¹⁸（県埋蔵文化財センター）において、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての住居跡が多数確認されているが、これらの住居跡群とは集落単位が異なるものかもしれない。矢野遺跡における弥生集落の構成単位および集落構造の復原が望まれる。

掘立柱建物跡の柱穴掘形は、その平面形態が方形もしくは長方形の整然とした形状を示し、矢野遺跡や阿波国府跡推定域において、前例のない掘形規模を持つ点において特異とされる。建物跡の規模や構造の復原に至るまでの柱穴検出数ではないが、建物跡SH04、06、07から想定される建物方位は正方位を指向するものである。なお出土遺物から、これらの建物跡群は平城資料との併行関係において、8世紀前半での造営と位置付けられる。

ところで国府町矢野周辺は条里地割が明瞭に現存する地域であり、この周辺地域の条里方位は $N-10^{\circ}-W$ とされる。そして阿波国府跡推定域や矢野遺跡でこれまでに確認された掘立柱建物跡には現存条里と方位を同じにするものが見られる。

阿波国府跡第6次調査における9世紀末～10世紀初頭の区画溝や掘立柱建物跡がある。また矢野遺跡では、 $N-7^{\circ}-10^{\circ}-W$ の18棟の掘立柱建物が確認されている。矢野遺跡の正式報告は出されていないが、時期的には9～10世紀前半と考えられている¹⁹。さらに、阿波国分尼寺の伽藍方位が $N-11^{\circ}-W$ とされ、現存条里と同方向とされる。このように現存条里地割の起源は、少なくとも阿波国分尼寺の造営時期まで遡れ、以後、古代～中世において大規模な土地区画整理が進められたものと考えられる。

本調査において確認された正方位を指向する掘立柱建物跡群については、 $N-10^{\circ}-W$ の条里と同方位の建物跡より時期的には遡るものと考えられ、また調査地周辺には、現存条里地割の方位に合致しない正方位指向の地割が見られる（第4図）。南北方向は $N-10^{\circ}-W$ の影響を受け乱れ気味であるが、東西方向にはほぼ乱れが見られない。正方位指向地割の推定残存範囲として方1町が読み取れ、少なくとも掘立柱建物跡群はこの範囲内において、ある程度の広がりをもって存在するものと想定する。このような正方位指向地割が、 $N-10^{\circ}-W$ 条里の中で残存する一つの想像として、調査地周辺に存在したであろう正方位指向の建築構造物が、後にこの地域で展開される土地区画としての $N-10^{\circ}-W$ の条里地割の施行を妨げた可能性が考えられる。

正方位指向の掘立柱建物跡については、阿波国府跡推定域においては、阿波国府跡第6^⑧・10^⑩次調査でも見られる。また国府跡推定域外では、1993年の庄遺跡での調査^⑨において確認されている。特に庄遺跡の調査では、出土遺物に畿内産土師器や製塩土器、竈の羽口があることから、官衙遺構の可能性が想定される。

本調査において確認された掘立柱建物跡群の特質として、柱穴掘形規模の特異性や建物方位での正方位指向が見られること、さらにはN-10°-Wの条里地割の影響を受けない建物が存在した地域であることが想定される。やはり阿波国府跡関連の中核遺構もしくは官衙遺構としての理解が必要とされるであろう。

(引用文献)

- (1) 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター『埋蔵文化財センター年報Vol.4 1992年度』1993年
- (2) 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター『埋蔵文化財センター年報Vol.5 1993年度』1994年
- (3) 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター『埋蔵文化財センター年報Vol.6 1994年度』1995年
- (4) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要1』1989年。
- (5) 徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会『矢野遺跡発掘調査概要』1991年。
- (6) (1)(2)(3)に同じ
- (7) (3)に同じ
- (8) 徳島市教育委員会『阿波国府跡発掘調査概要6』1988年。
- (9) 徳島市教育委員会『阿波国府跡発掘調査概要10』1992年。
- (10) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要6』1996年。

IV 阿波国府跡 (水道管理設工事立会)

(資料紹介)

はじめに

徳島市水道局の第4期拡張事業である国府統合配水管埋設工事は平成4年度から始まり、徳島市の西部である国府町・不動町・一宮町において実施されている。現在も事業は継続中であり今後、国府町および徳島市の南部地域である上八万町・多家良町・波野町において予定されている。事業の実施計画段階から、工事区域の一部が市内所在の埋蔵文化財包蔵地内に該当することから、その取扱について協議した結果、工事立会の実施により、周辺地域の堆積土層の把握および遺物採取に努めた。特に平成6年度実施事業については、阿波国府跡推定域の中心とされる観音寺周辺において実施され、工事立会ではあるが、周辺地域での堆積土層の確認および遺物採取に成果を得ている。ただ出土遺物については、一地点においてある程度のまとまりを示す出土例も見られるが、一括性についての信頼性を認めることをできるものではない。

1 出土遺物と出土地点 (第1.2図, 図版1.2)

出土位置は遺物出土位置図(第1図)のA~Mの各地点であり、括弧番号で遺物を示した。

1,2は土師器環であり、2の体部には強いナデが施され多段状を呈する。3,4は器高の低い環形態を呈し、口縁端部は丸くおさめる。いずれも回転台土師器である。

5~8は丸底を呈する土師器環である。内外面ナデ調整により明確ではないが、環7には「コテあて・押し出し」の痕跡が見られることから、環5,6も同様の手法によるものと考えられる。環7は環5,6より器高が増している。環5~7は環3を形態を基本とし、底部の丸底化を図ったものと考えられる。

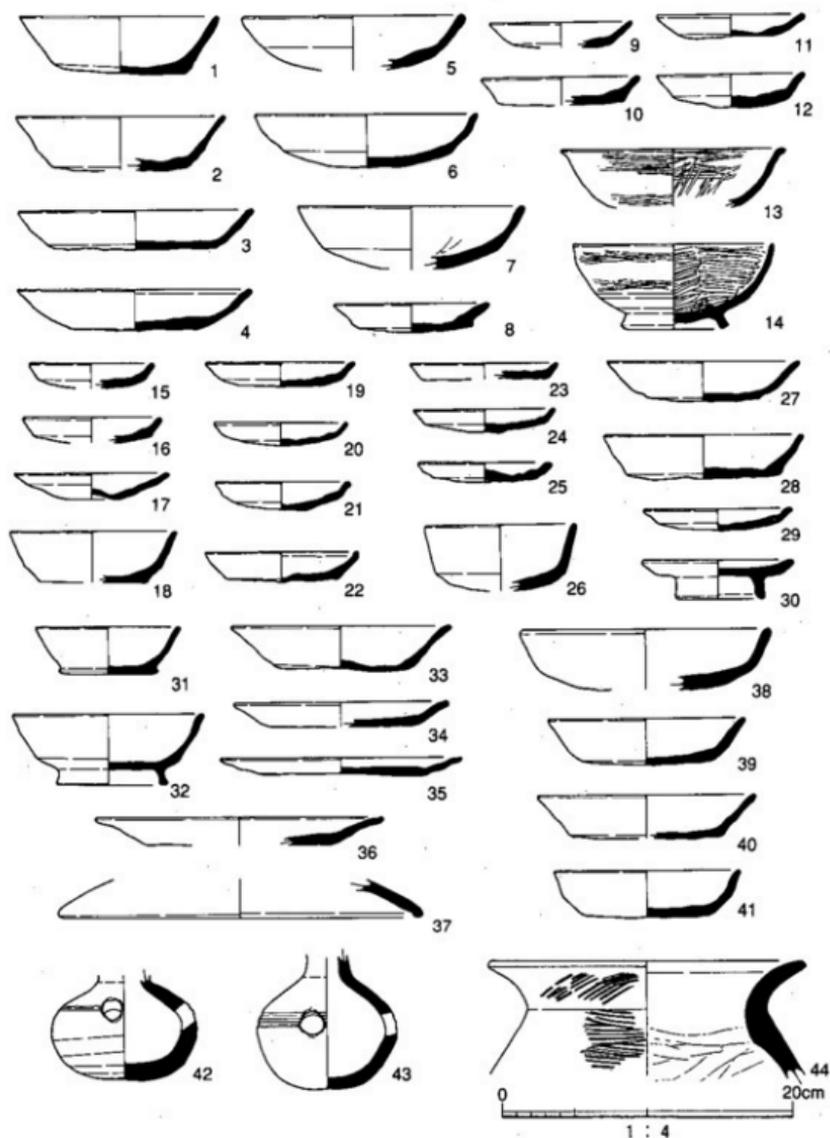
8~12は土師器小皿であり、11は底部~口縁部への屈曲がスムーズであるが、8~10,12は屈曲が明瞭である。いずれも回転台土師器である。

13は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部が外反する椀であろうか。内外面にヘラミガキが施され、火樨が見られる。胎土は乳黄色を呈し、砂粒を含まず精良である。

14は黒色土器B類であり、丸底の椀状を呈する体部に、高台は端部内面が接地するハの字状に踏ん張るものである。回転ヘラケズリにより底部成形がなされているが、「コテあて」のような痕跡が見られ、「押し出し」併用の可能性もある。体部内面には6分割のヘラミガキ、体部外面には回転ヘラミガキが施される。



第1図 遺物出土位置図



第2図 出土遺物

15～17は土師器小皿であり、18は土師器環である。18は体部がナデにより屈曲し、明瞭な稜線を生ずる。19～25は土師器小皿であり、22は口縁端部に肥厚が見られる。27, 28は器高の低い土師器環である。27は外反する口縁部を呈し、28は環18と同様に体部がナデにより屈曲する。底部はわずかに円盤状を呈する。いずれも回転台土師器である。

26は器高に深みを持つ須恵器環であり、底部には回転ヘラケズリが施され、ヘラ記号が見られる。29は土師器小皿、30は土師器足高台皿である。

31は土師器環、32は土師器高台付環、33は土師器環で口縁部が大きく外反する。34～36は土師器皿で口縁端部を肥厚させる。37は土師器蓋で器壁は厚く、口縁端部を肥厚させる。口縁端部の肥厚、沈線は曖昧である。29～37は回転台土師器である。

38は土師器環であるが、表面磨滅が著しく成形・調整が不明瞭であるが、底部にヘラケズリの痕跡が見られる。

39, 40は土師器環で器高は低い。40は赤色塗彩品である。いずれも回転台土師器である。

41は土師器環で体部中位でナデにより明瞭な稜線を生じ屈曲する。回転台土師器である。

42, 43は須恵器碗で、頸部以上を欠損する。44は須恵器甕であり、口縁部～体部外面にタタキ体部内面にヘラケズリが施される。

2 小 結

出土地点の内、A・C・G地点においては比較的まとまった数量の資料が見られるものの、やはり出土状況からその一括性には問題が残るものである。

採取された多くは土師器環・皿である。土師器環・皿については型式変化が迫り難く、通常は畿内産の搬入資料との共伴関係において理解されている。ただこれらの資料が、必ずしも年代観を考える上での基準資料に成りえないのかという訳ではなく、個々の資料が持つ特徴的な形態や製作手法は時期決定の有力な手掛かりになる。

回転台土師器である高台付環32や足高台皿30、黒色土器B類高台付環14は10世紀代には出現し、土師器皿34～36の口縁端部の肥厚は極めて形骸化した処理であり、平城併行期に見られる口縁肥厚形態とは明らかに異なるものの、やはり10世紀代まで残るものと考えられる。また土師器環・皿は、底部の切り難し手法には回転ヘラ切りしか認められず、回転糸切りへの移行（全面移行ではない）が12世紀中葉であることを考慮すれば、その下限として概ね12世紀代が想定される。このような年代観はこれまで観音寺周辺において確認されている土器様相に決して反するものではない。

特異な資料として土師器5～7、黒色土器14の成形手法がある。土師器5～7は丸底部を呈する環であり、「コテあて・押し出し」の痕跡が見られる。また黒色土器14の底部成形には回転

ヘラケズリにより丸底化が図られている。このような形態・手法をもつ資料は、これまで吉野川下流域では報告例がなく、坏形態から碗形態への変遷過程をも含めて、当該地域における土器製作技法を再考する必要がある¹¹⁾。

ところで、観音寺を中心とした地域に阿波国府跡推定地を想定するのは、1988年の阿波国府跡第6次調査成果¹²⁾が最大の根拠とされる。確かにこの地域では旧地形の標高が比較的高く、遺物包含層も通常的に認められ、明らかに多時期にわたり「遺跡」として機能していた痕跡が見られる。

今回の工事立会における堆積土層の観察からは、観音寺を中心とした場合、東西200m×南北350m(第1図参照)の範囲が、「遺跡」立地として良好な条件を備えた一地域として想定される。そしてこの周縁地域では、旧河道もしくは沼状化した旧地形の低下が見られ、著しく様相は一変する。この地域の旧地形の形成状況は、沖積地ならではの複雑さに対する情報蓄積が充分でないため明確ではないが、観音寺周辺で見られる南北方向に長い「島状微高地」は、やはり南北方向に存在したであろう旧河川の堆積作用による可能性が考えられる。

観音寺周辺における時間的な継続性における遺物の集中度や「遺跡」の立地条件の観点からこの地域における優位性・重要性は周辺地域とは隔絶しているかもしれない。やはり阿波国府跡中心推定地の有力候補地として連動しているものであるが、阿波国府跡の規模・構造は現況の条里地割からではなく、周辺地域の旧地形の復原から考慮すべき必要がある。

(註)

- (1) 出土遺物について、徳島県埋蔵文化財センター辻 佳伸・久保臨美朗の両氏から御意見をいただいた。
- (2) 阿波国府跡第6次調査では、大量の出土遺物の中、畿内産模倣の黒色土器A類、京都系の緑釉陶器、篠窯の須恵器壺、硯、墨書「政所」など、宮衙遺跡特有の遺物が見られる。時期的には9世紀末～10世紀初頭に位置付けられ、少なくともこの時期の阿波国府跡は観音寺周辺に所在するとの見解が強い。

写 真 図 版

I 名東遺跡（住宅開発工事）



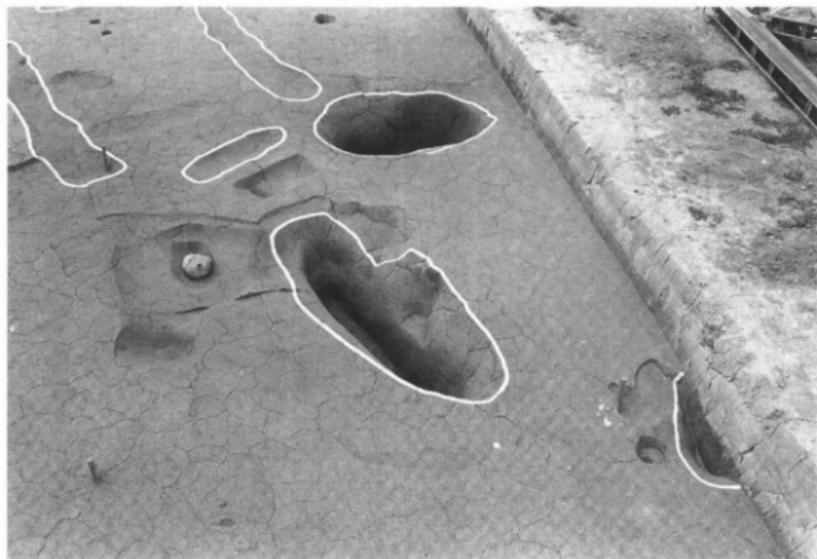
調査地 I 区全景

西より



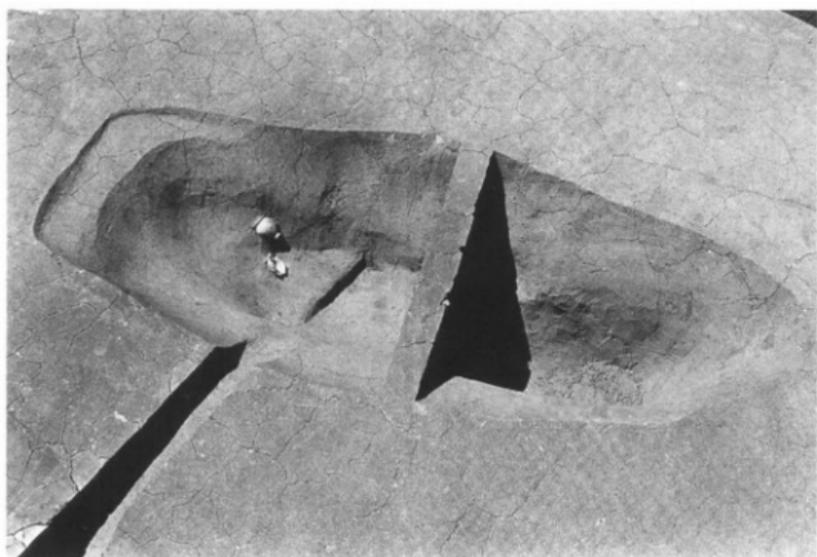
方形周溝墓群検出状況

東より



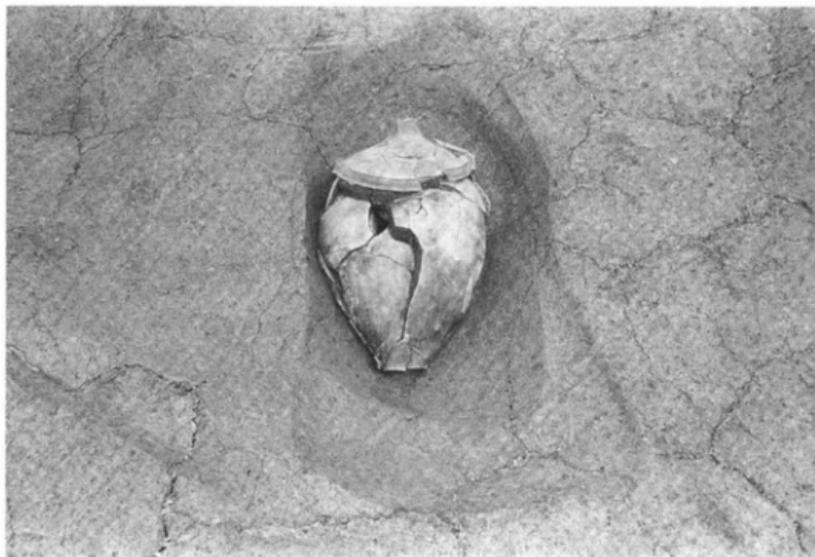
名東19号墓検出状況

東より



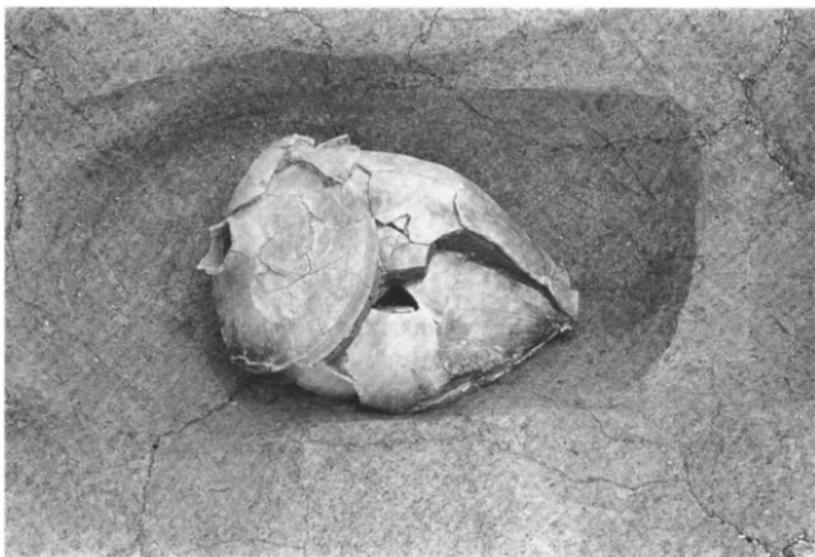
名東19号墓南周溝遺物検出状況

南東より



土器棺墓 SI01検出状況

西より



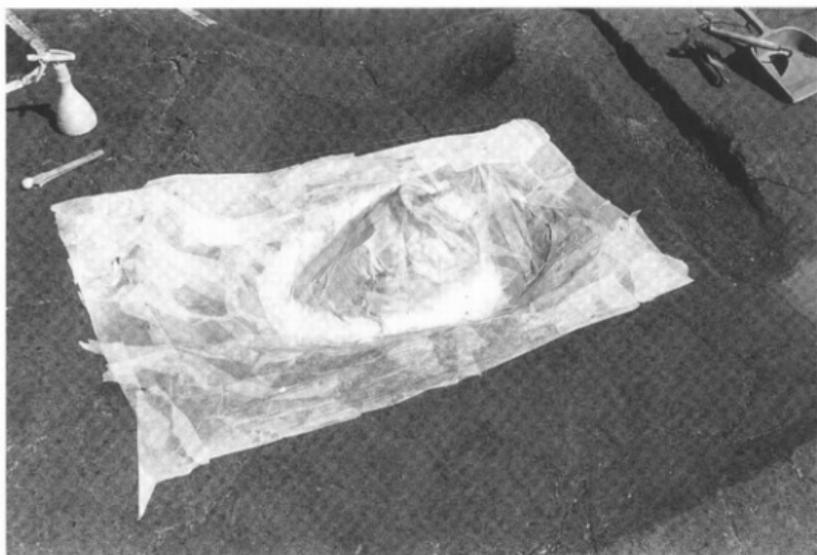
土器棺墓 SI01検出状況

北より



土器棺墓 S101切り取り作業

北西より



土器棺墓 S101切り取り作業

南西より



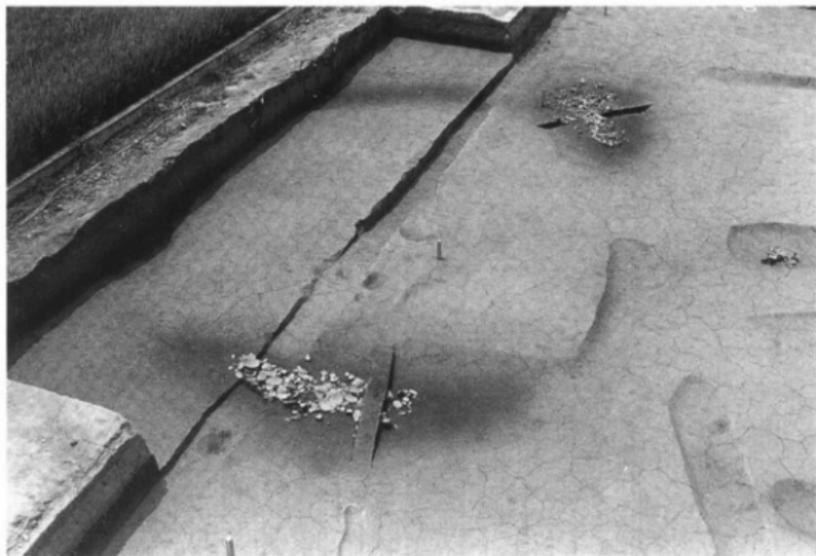
土器棺墓 SI01切り取り作業

東より



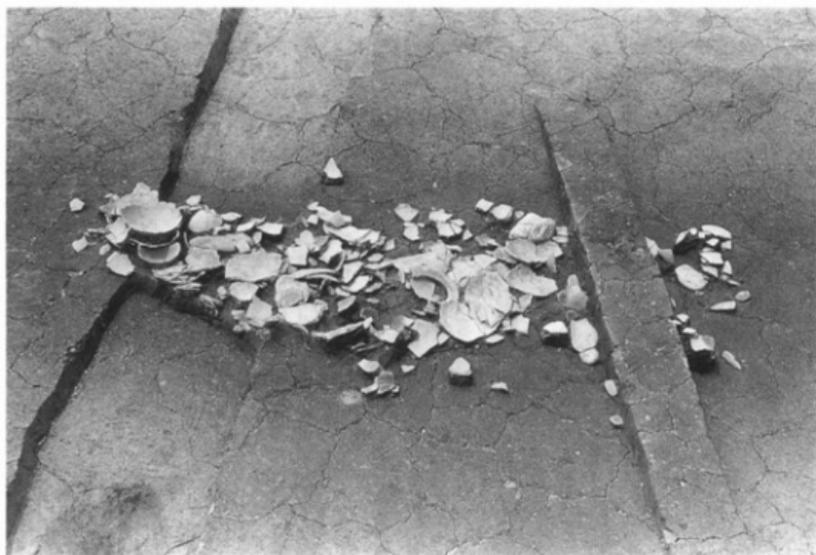
土器棺墓 SI01切り取り作業

南東より



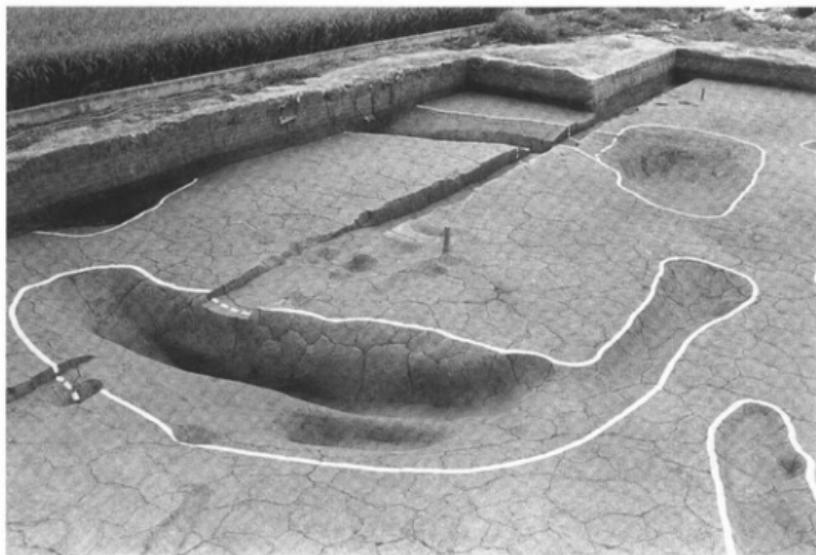
名東21号基上層遺物検出状況

東より



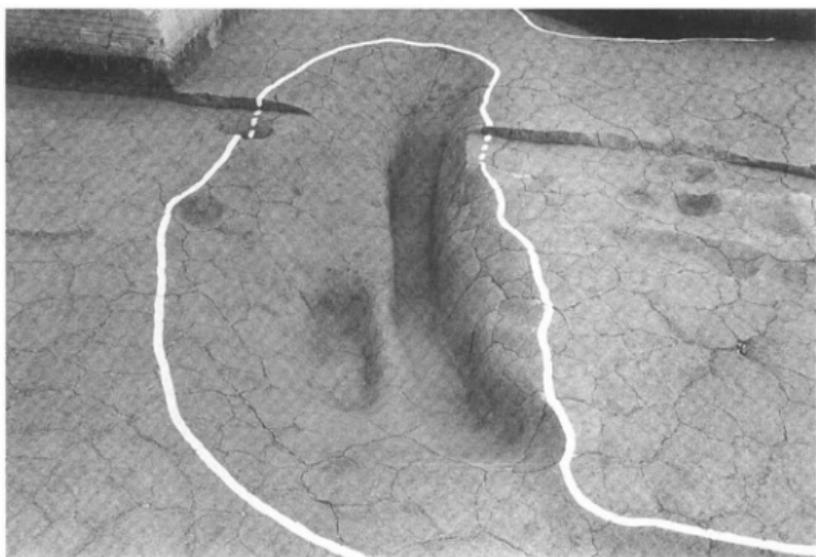
名東21号基東周溝上層遺物検出状況

東より



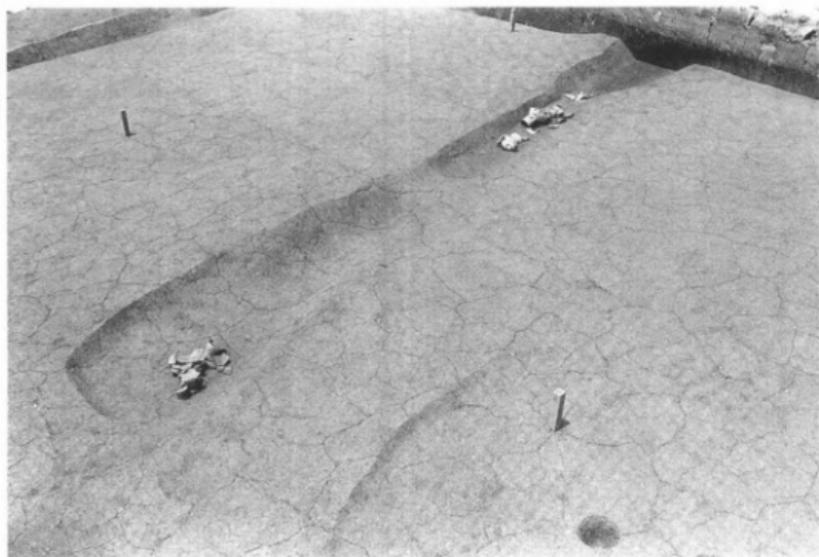
名東21号墓検出状況

北東より



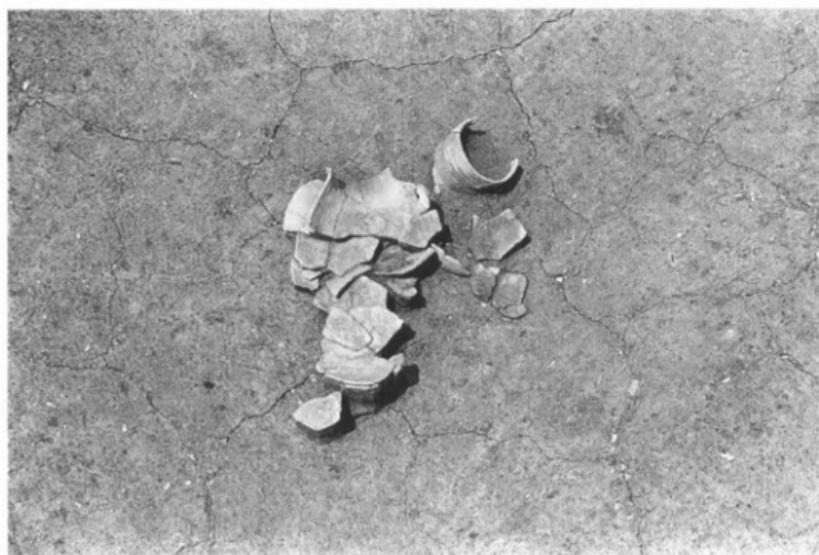
名東21号墓東周溝検出状況

北より



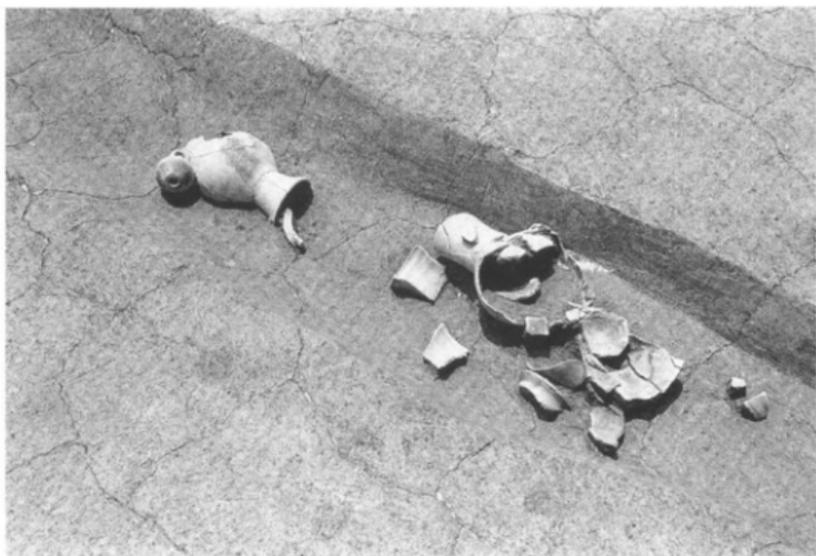
名東22号墓東周溝遺物検出状況

南東より



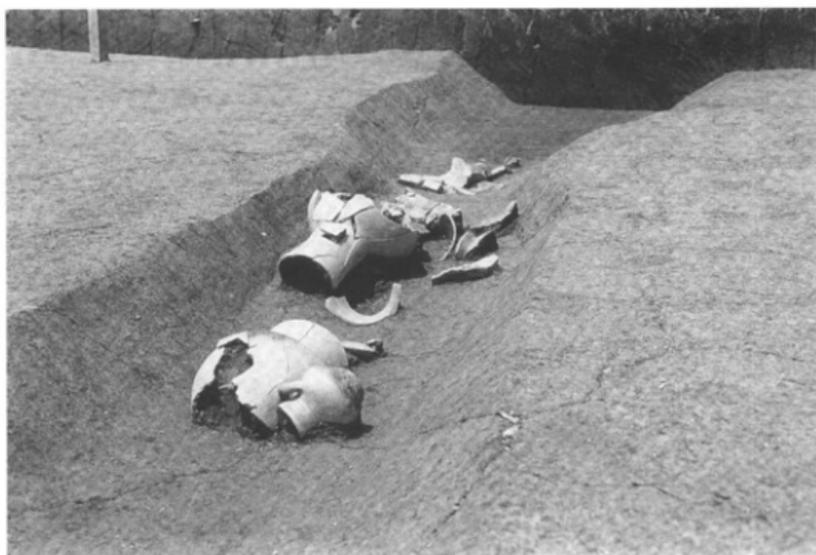
名東22号墓東周溝遺物検出状況

南東より



名東22号墓東周溝遺物検出状況

北東より



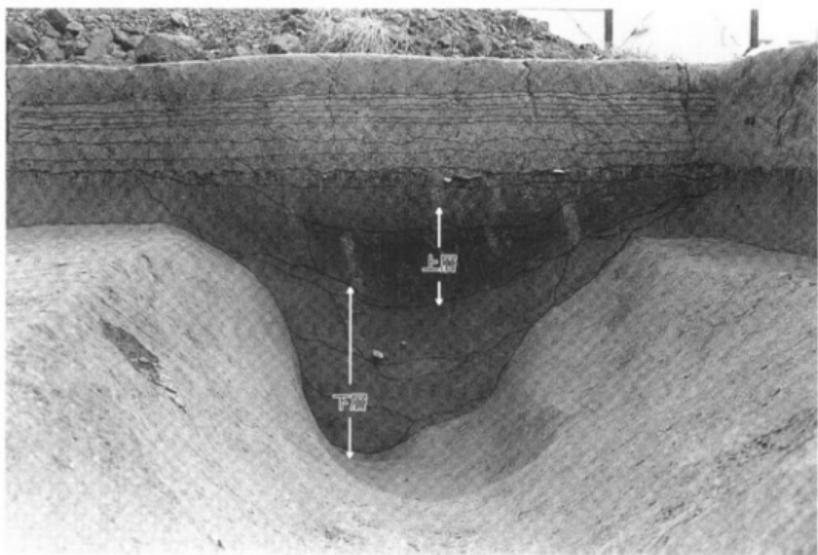
名東22号墓東周溝遺物検出状況

南東より



名東23号墓検出状況

東より



名東23号墓西周溝堆積状況

北より



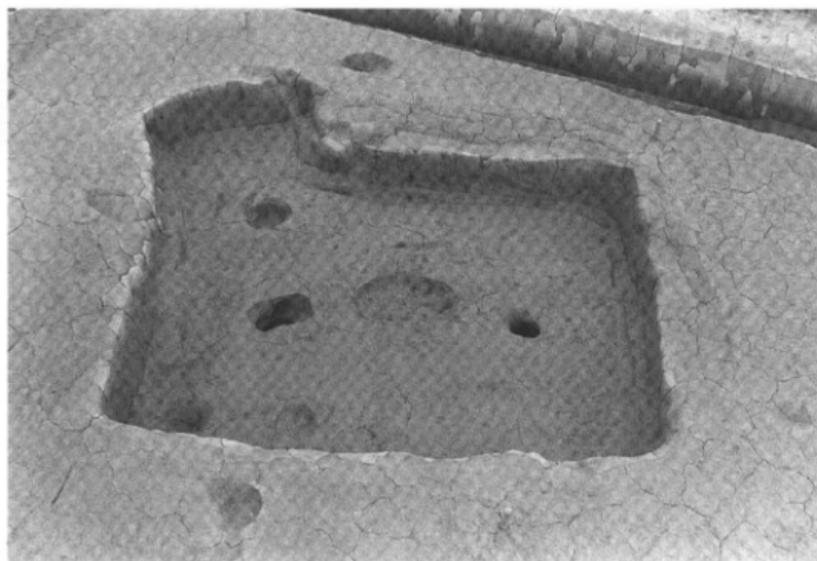
名東23号墓南周溝遺物検出状況

西より



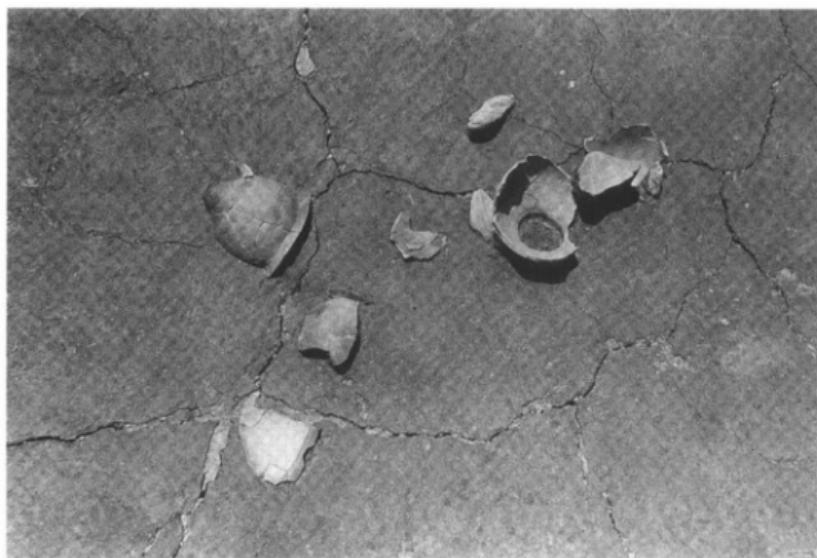
名東23号墓南周溝内土器棺 SI02検出状況

東より



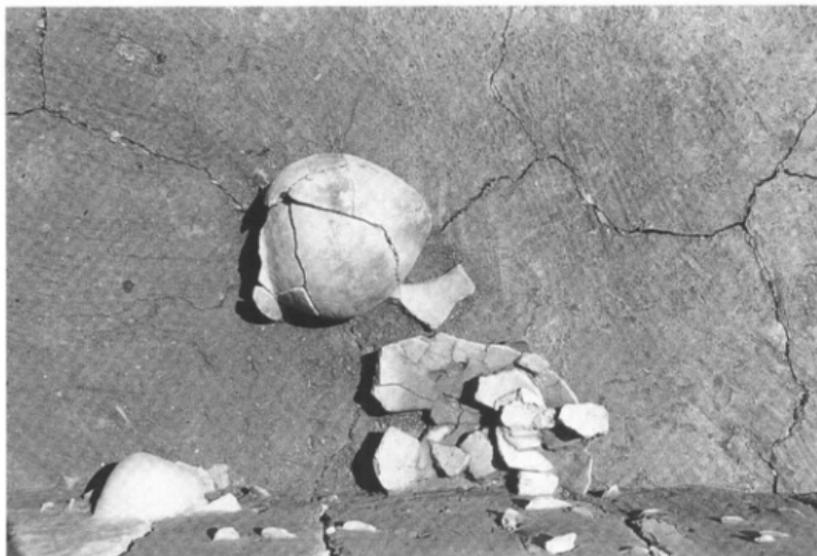
竪穴住居跡 SA01検出状況

北西より



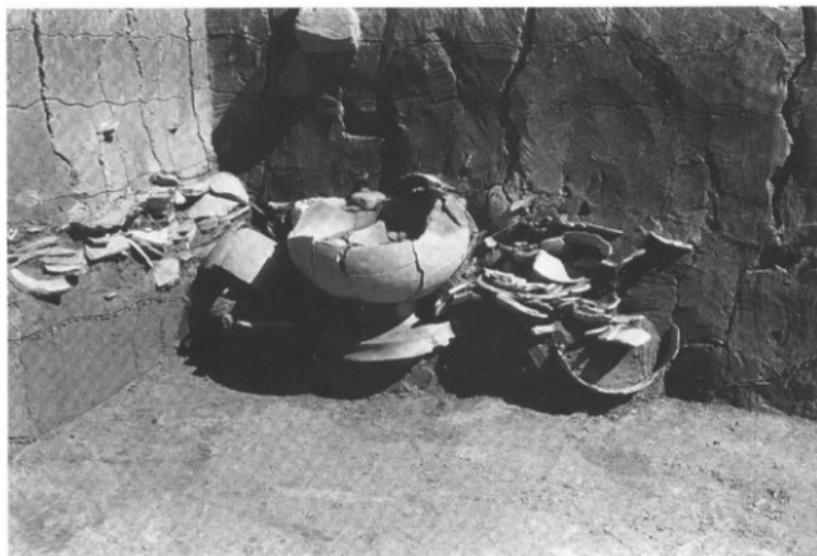
竪穴住居跡 SA01遺物検出状況

東より



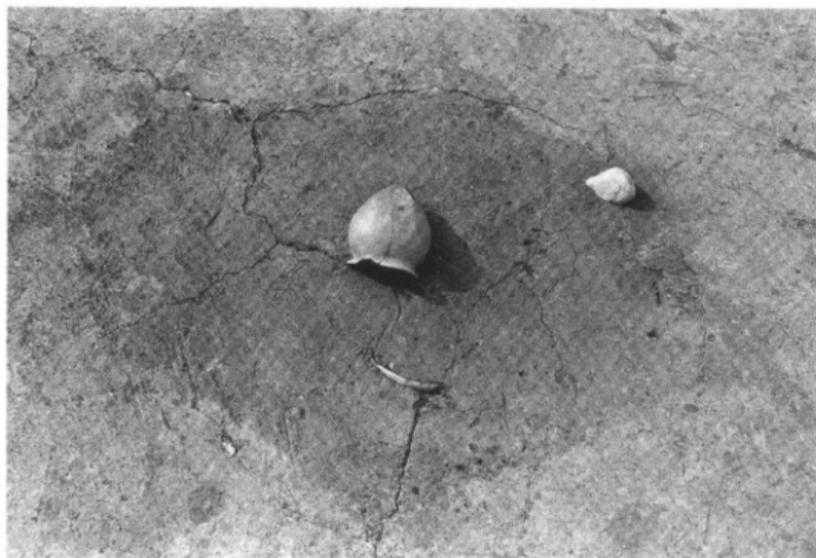
竪穴住居跡 SA01遺物検出状況

南西より



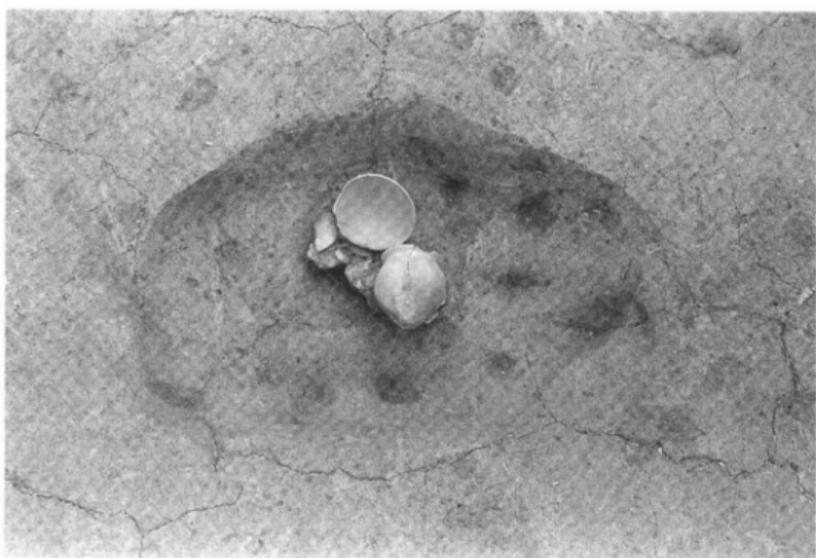
竪穴住居跡 SA01遺物検出状況

北西より



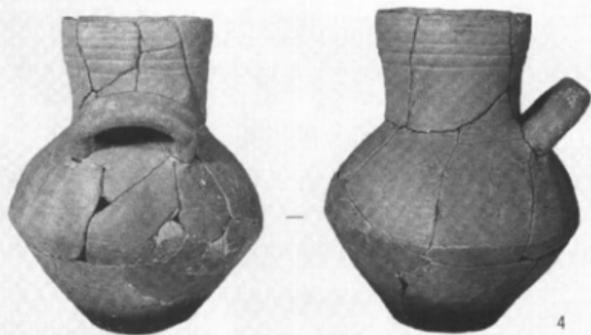
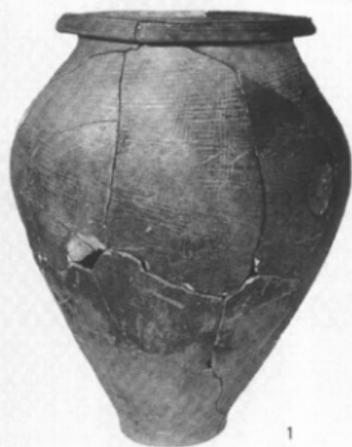
竪穴住居跡 SA01 炉跡部遺物検出状況

北西より



竪穴住居跡 SA01 炉跡部遺物検出状況

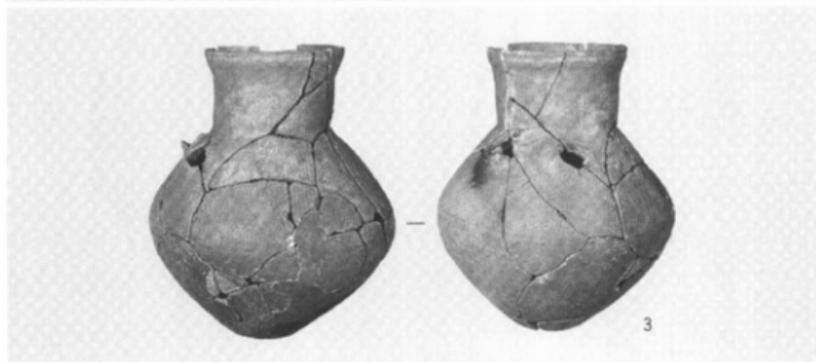
南東より



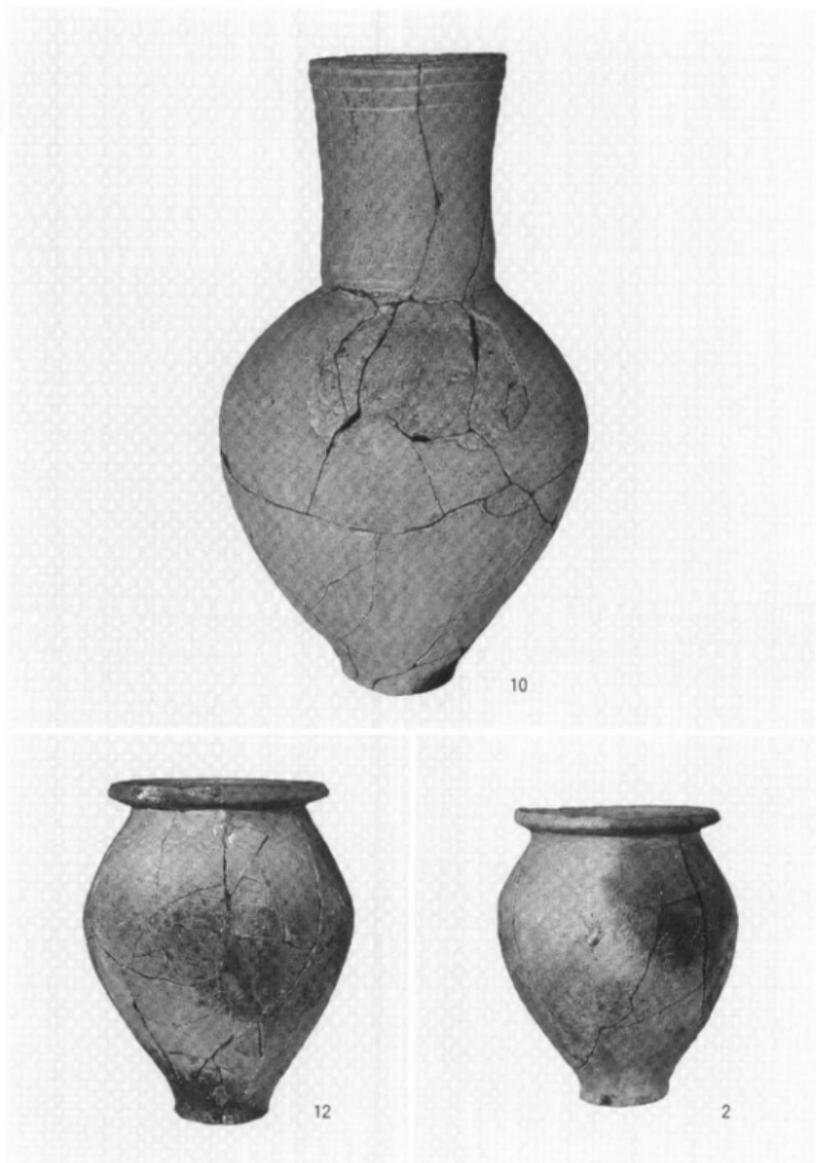
名東19号墓南周滿出土遺物



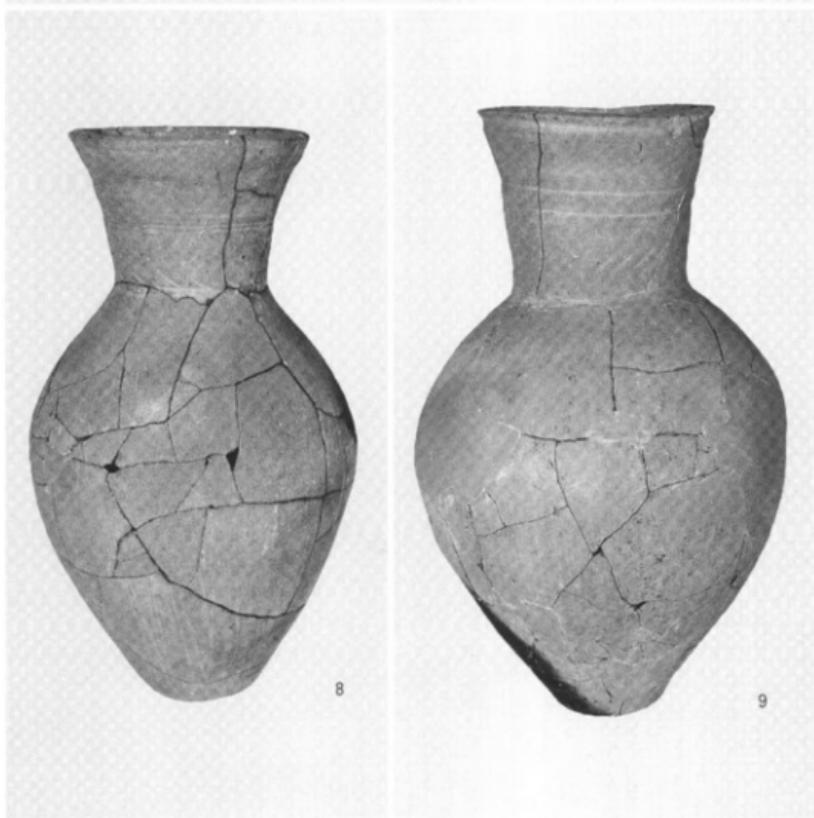
土器棺墓 S101出土遺物



名東19号墓南周溝 (3)、名東21号墓東周溝下層 (13) 出土遺物



名東19号墓南周滿（2）。名東21号墓東周滿下層（12）。名東22号墓東周滿（10）出土遺物



名東22号墓東周漢出土遺物



15



20



19



22



16

名東23号墓周溝上層出土遺物



21



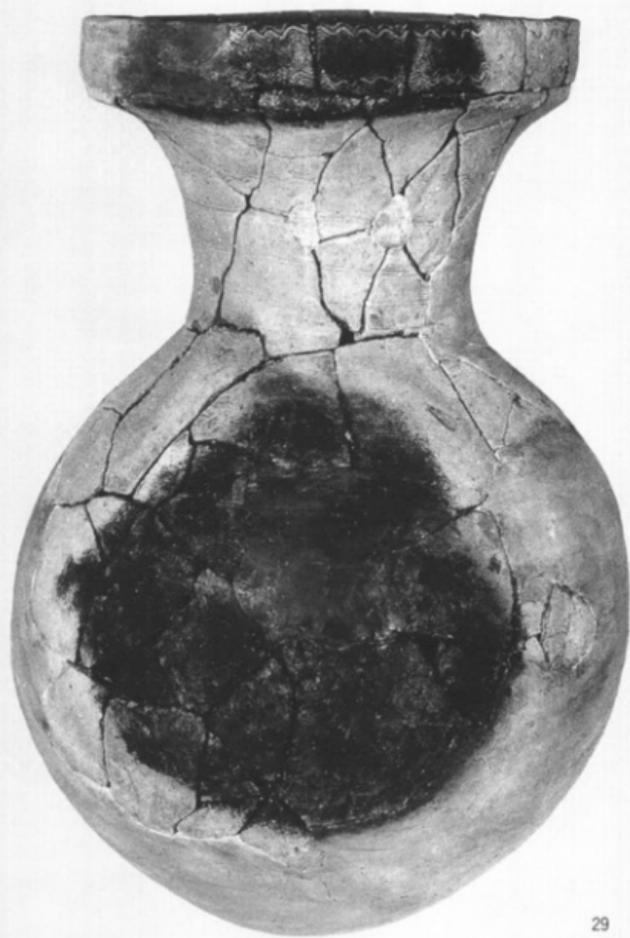
25



26

名東23号墓周溝上層出土遺物

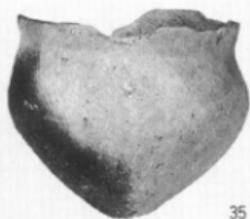




名東23号墓周溝上層出土遺物



30



35



31



36



33



37



34



38

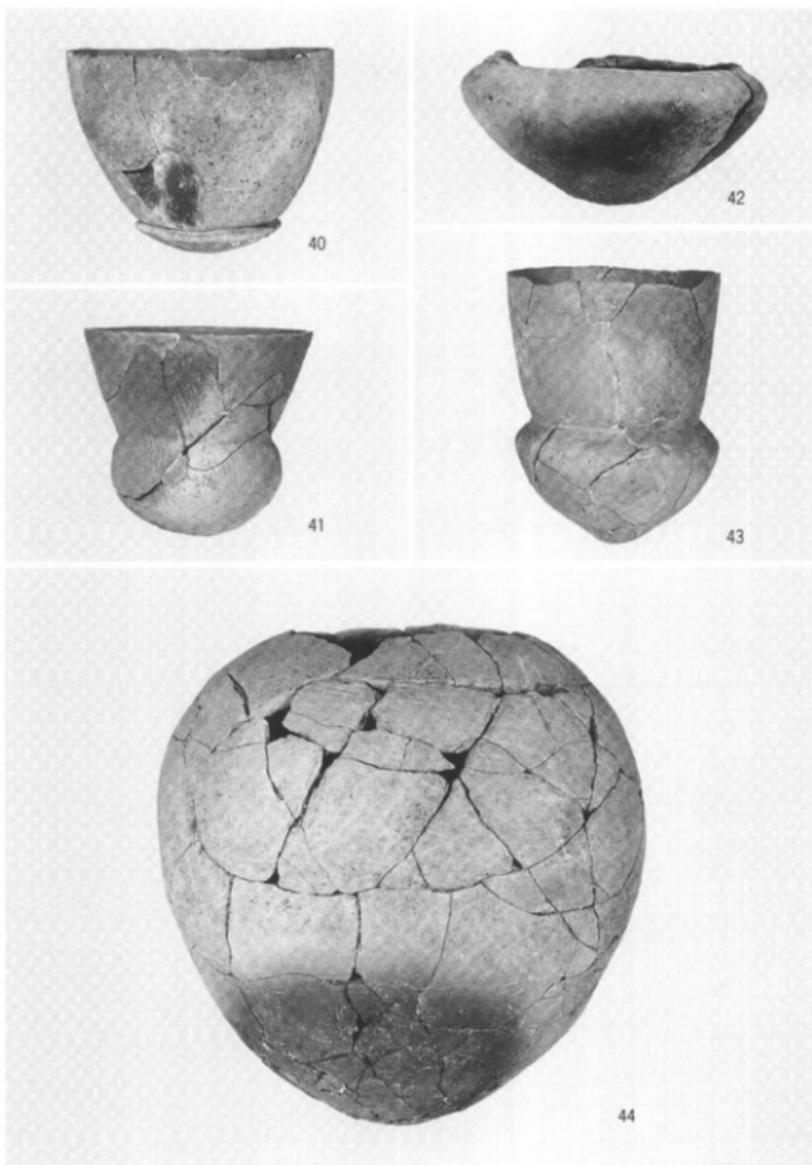


32



39

名東23号墓周溝上層出土遺物



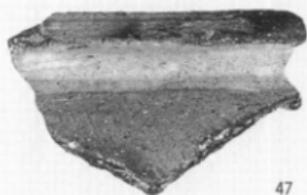
名東23号墓周溝上層(40~43)、土器棺墓SI02(44)出土遺物



45



46



47



50



48

名東23号墓周溝下層出土遺物



51

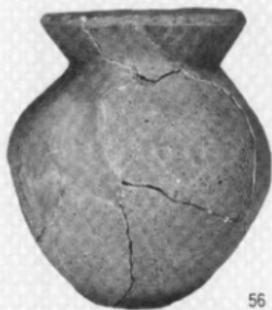


53



54

名東23号墓周溝下層出土遺物



56



57



58

竖穴住居跡 SA01出土遺物



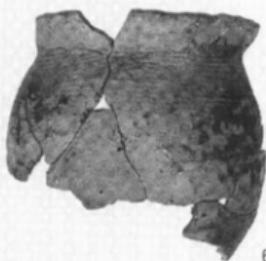
竪穴住居跡 SA01出土遺物



63



66



64



67



68

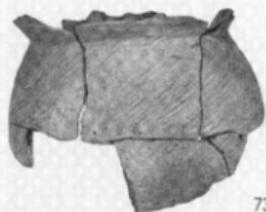


69

竪穴住居跡 SA01出土遺物



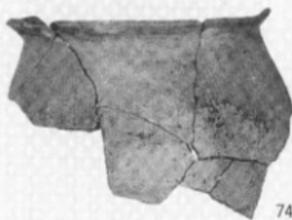
竪穴住居跡 SA01出土遺物



73



77



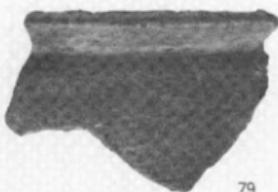
74



78



75



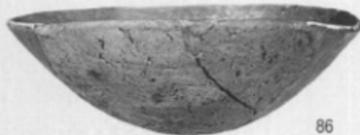
79



84



85



86



89



90



82



87



88



83



91

竪穴住居跡 SA01出土遺物

写 真 図 版

Ⅱ (仮称) 松熊神社集石状遺構 (阿波史跡公園整備工事)



調査地近景

(東から)



同 上

(西から)



集石状遺構検出状況

(西から)



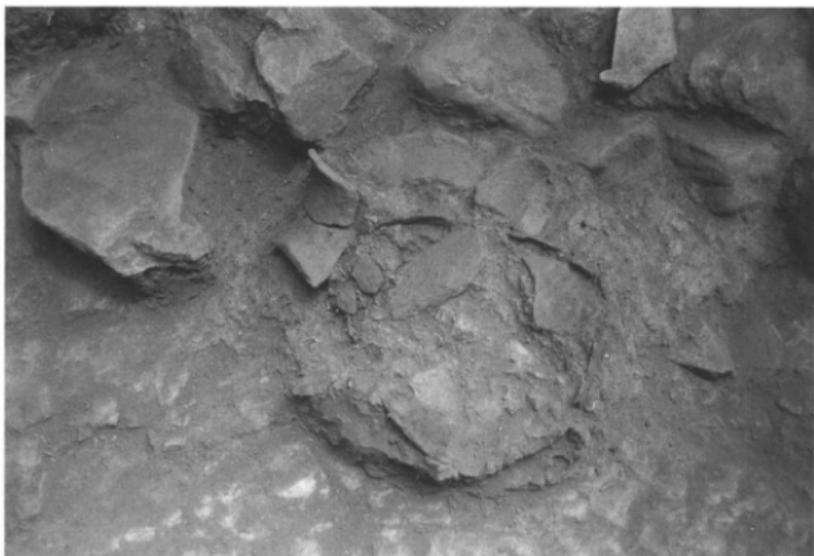
同 上

(北から)



壺形埴輪（1）出土状況

（西から）



同 上

（西から）